Part 2

高等学校の部

第1章

高等学校と高校生の理解

◆第１節　高等学校・高校生の状況把握と進路先の理解

１　高等学校・高校生の状況

①　高等学校の数

・2013年度の学校数は 4,981校（本校4,893校，分校88校）で、前年度より 41校減少している。

・中高一貫教育を行う学校数は併設型が 319校、連携型が 83校で、併設型は前年度より 10校増加、連携型は前年度と同数である。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【資料】高等学校の設置者別学校数

（校）

区　分	計	国　立	公　立	私　立	計のうち中高一貫教育を行う学校（再掲）	
					併設型	連携型
平成 15 年度	5,450	15	4,117	1,318	50	54
20	5,243	16	3,906	1,321	220	81
21	5,183	16	3,846	1,321	247	82
22	5,116	15	3,780	1,321	273	82
23	5,060	15	3,724	1,321	289	83
24	5,022	15	3,688	1,319	309	83
25	**4,981**	**15**	**3,646**	**1,320**	**319**	**83**

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

②　高校生の数

・2013年度の生徒数は 3,319,758人（男子1,672,347人，女子1,647,411人）で，前年度より 35,851人減少している。

・全日制課程（本科）の生徒数は 3,204,380人、定時制課程（本科）の生徒数は 106,558人である。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【高等学校の生徒数】

（人）

区　分	計					うち　本　科			本務教員１人当たりの生徒数
		男	女	全日制	定時制	計	全日制	定時制	
平成15年度	3,809,827	1,927,522	1,882,305	3,698,972	110,855	3,801,646	3,691,177	110,469	14.7
20	3,367,489	1,704,140	1,663,349	3,258,851	108,638	3,358,711	3,250,301	108,410	14.0
21	3,347,311	1,694,971	1,652,340	3,235,937	111,374	3,338,861	3,227,676	111,185	14.0
22	3,368,693	1,703,397	1,665,296	3,252,457	116,236	3,360,101	3,244,052	116,049	14.1
23	3,349,255	1,690,804	1,658,451	3,233,248	116,007	3,340,561	3,224,739	115,822	14.1
24	3,355,609	1,691,921	1,663,688	3,243,422	112,187	3,347,127	3,235,116	112,011	14.1
25	**3,319,758**	**1,672,347**	**1,647,411**	**3,213,035**	**106,723**	**3,310,938**	**3,204,380**	**106,558**	**14.1**

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

③　高等学校の学科別生徒数

・2013年度における本科の生徒数3,310,938人を学科別にみると、普通科が 2,398,368人で最も多く、本科の生徒数の 72.4％を占めている。次いで、工業科が 260,559人、で 7.9％、商業科が 209,416人で 6.3％、総合学科が 173,680人で 5.2％、等となっている。

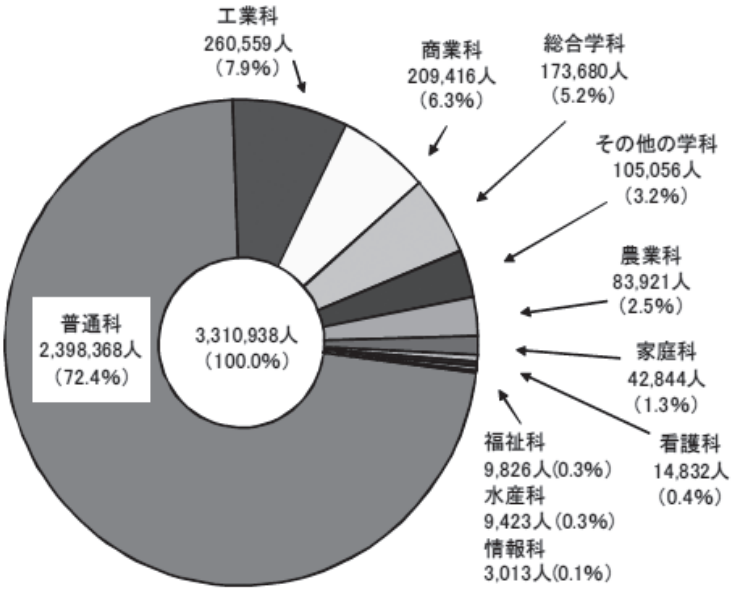
・1999年度の学校基本調査結果では、本科の生徒数4,203,750人のうち、普通科の生徒が 3,087,519人で 73.5％、工業科が 268,388人で 8.8％、商業科が 364,177人で 8.7％、総合学科が 58,789人で 1.4％であった。

・1970年度は、普通科の生徒が 58.5％、職業学科（専門高等学校）の生徒が 40.7％、その他の専門学科（理数、体育、音楽、美術、外国語、国際関係等の学科）の生徒が 0.8％であったが、職業学科の生徒の比率が年々減少している。

・最近の 20年間は、普通科の生徒が 73％前後でほぼ一定するとともに、普通科と職業学科とを総合する学科として 1994年に創設された総合学科で学ぶ生徒の比率が高くなっている。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【高等学校の学科別生徒数（本科）】



（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

2　高校生の学習、日常生活、意識

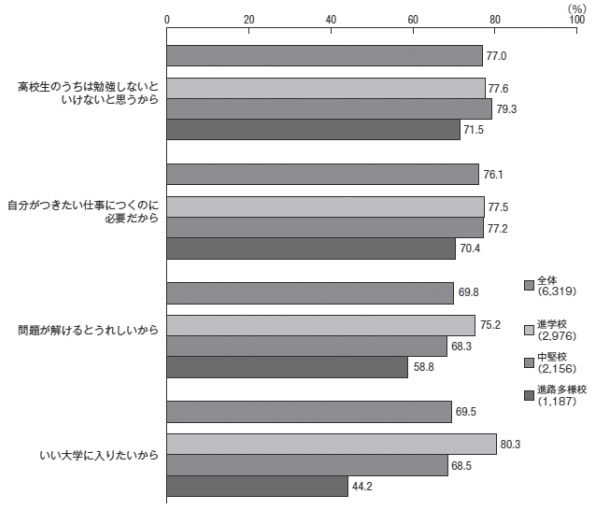
①　高校生が勉強する理由

・高校生が勉強する理由は、全体的にみると「高校生のうちは勉強しないといけないと思うから」との回答が 77.0％と最も高い。次いで「自分が就きたい仕事に就くのに必要だから」が 76.1％である。

・高等学校のタイプ別では、「いい大学に入りたいから」が、進学校（偏差値60以上目安）、では 80.3％と最も高い勉強理由である。中堅校（偏差値50 ～ 59目安）では 68.5％、進路多様校（偏差値50未満目安）では 44.2％であり、他の理由と比較すると低い。

（参考：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月を基に作成）

【勉強をする理由（全体　偏差値層別）（高等学校１・２年生）】



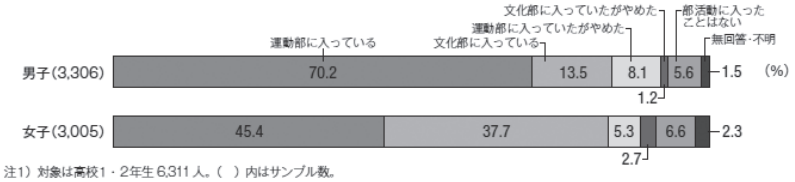
（資料出所：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月）

② 部活動への参加状況

・部活動への参加状況は、男子よりも女子の方が文化部に参加する比率が高い。活動日数は、運動部は「5日」～「7日（毎日）」が90.8%であるのに対し、文化部は「ほとんど活動していない」～「7日（毎日）」まで回答にばらつきがある。

（参考：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月を基に作成）

【部活動への参加状況（性別）（高等学校１・２年生】



注1）対象は高校1・2年生6,311人。（ ）内はサンプル数。

活動日数 (%)

	ほとんど活動していない	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日（毎日）	無回答・不明
運動部（4,116）	1.0	0.4	1.1	2.5	2.8	14.2	44.3	32.3	1.5
文化部（1,701）	7.2	11.2	11.8	8.0	6.2	17.3	16.9	20.5	0.8

（5日～7日：9割）

活動時間

	1時間未満	1時間くらい	1時間30分くらい	2時間くらい	2時間30分くらい	3時間くらい	3時間30分くらい	4時間くらい	4時間以上	無回答・不明
運動部（4,116）	0.3	0.9	8.8	22.7	26.5	25.8	7.1	3.4	2.8	1.6
文化部（1,701）	4.0	8.0	19.3	29.2	19.3	13.6	2.8	1.2	1.0	1.5

注1）「運動部」は「運動部に入っている」＋「運動部に入っていたがやめた」、「文化部」は「文化部に入っている」＋「文化部に入っていたがやめた」。
注2）対象は高校1・2年生5,817人。（ ）内はサンプル数。

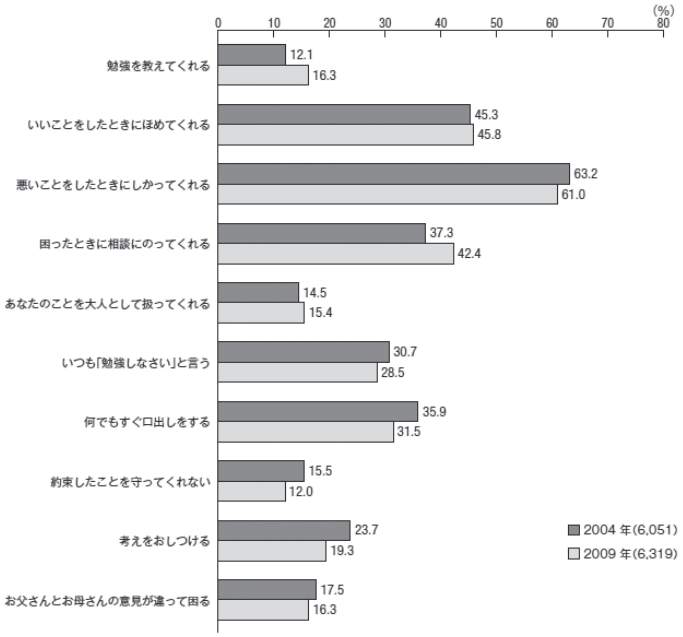
（資料出所：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月）

③ 親子関係

・親との関係については、近年、「勉強を教えてくれる」や「困ったとき相談に乗ってくれる」が上昇している。他方、「何でもすぐに口出しをする」や「考えをおしつける」については低下している。

（参考：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月を基に作成）

【親との関わり（高等学校１・２年生）】



（資料出所：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月）

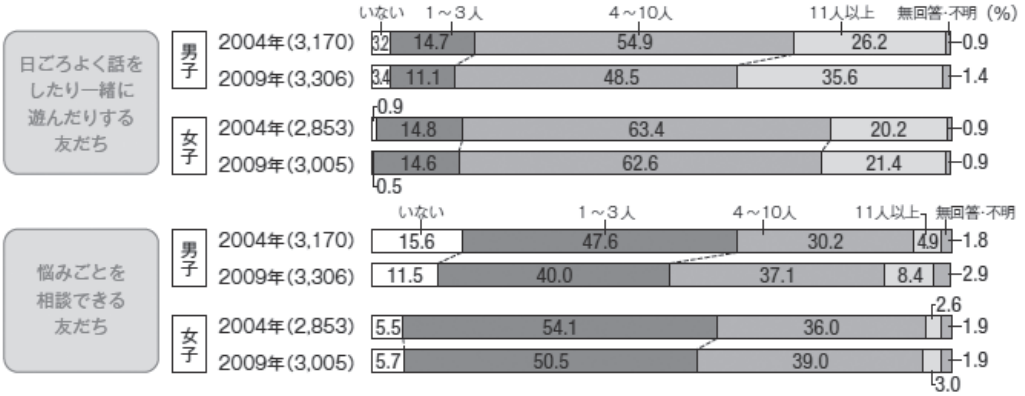
④　友人関係

・男子は、「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」が11人以上いる比率や「悩みごとを相談できる友だち」が4人以上いる比率が高まっている。「グループの仲間同士で固まっていたい」や「仲間はずれにされないようには話を合わせる」も上昇している。

・女子は、「悩みごとを相談する友だち」が1～10人の比率が男子より高く、そのような友だちがいないという比率が低い。

（参考：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月を基に作成）

【友だちの数（性別）（高等学校１・２年生）】



注1）「1～3人」は「1人」＋「2～3人」、「4～10人」は「4～6人」＋「7～10人」、「11人以上」は「11～20人」＋「21人以上」。
注2）対象は高校1・2年生。（　）内はサンプル数。

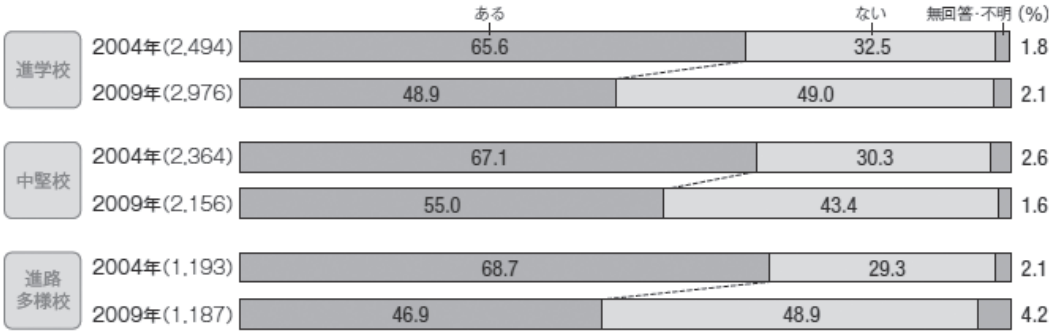
（資料出所：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月）

⑤　将来なりたい職業の有無

・進学校で、将来なりたい職業が「ある」と回答した高校生の比率は2004年の65.6％から2009年は48.9％へと大きく落ち込んでいる。

（参考：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月を基に作成）

【将来なりたい職業の有無（偏差値層別（高等学校１・２年生）】



注1）「進学校」は偏差値60以上目安、「中堅校」は偏差値50～59目安、「進路多様校」は偏差値50未満目安。
注2）対象は高校1・2年生。（　）内はサンプル数。

（資料出所：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月）

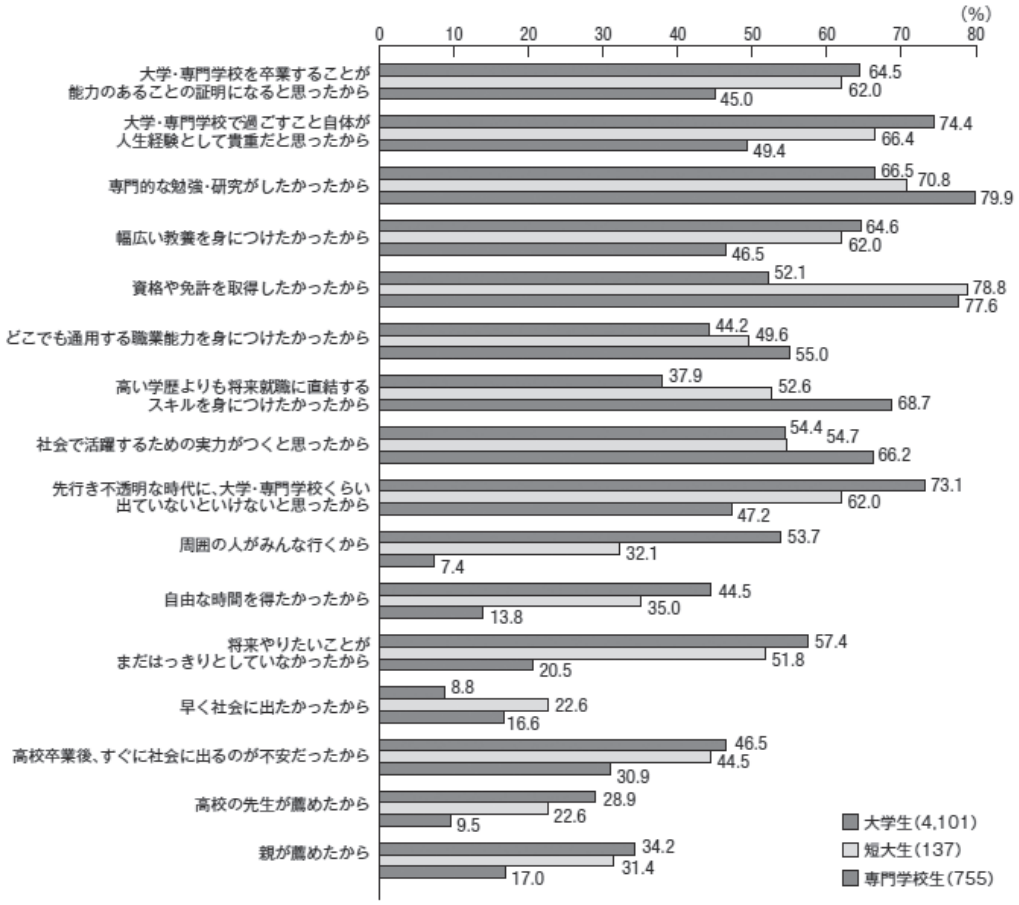
⑥　高等教育機関への進学理由

・大学生の進学理由としては「大学で過ごすこと自体が人生経験として貴重だと思ったから」が74.4％と最も高い。次いで「先行き不透明な時代に、大学くらい出ていないといけないと思ったから」が73.1％である。

・短期大学生と専門学校生のそれぞれの学校への進学理由は、「資格や免許を取得したかったから」が短期大学生78.8％、専門学校生77.6％と高い。また、専門学校生の79.9％は、「専門的な勉強・研究がしたかったから」と回答している。

（参考：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月を基に作成）

【大学・短期大学・専門学校への進学理由】



注1）「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の%。選択肢は「とてもあてはまる」「まああてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の5段階。
注2）対象は大学生 4,101 人、短大生 137 人、専門学校生 755 人。（　）内はサンプル数。

（資料出所：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月）

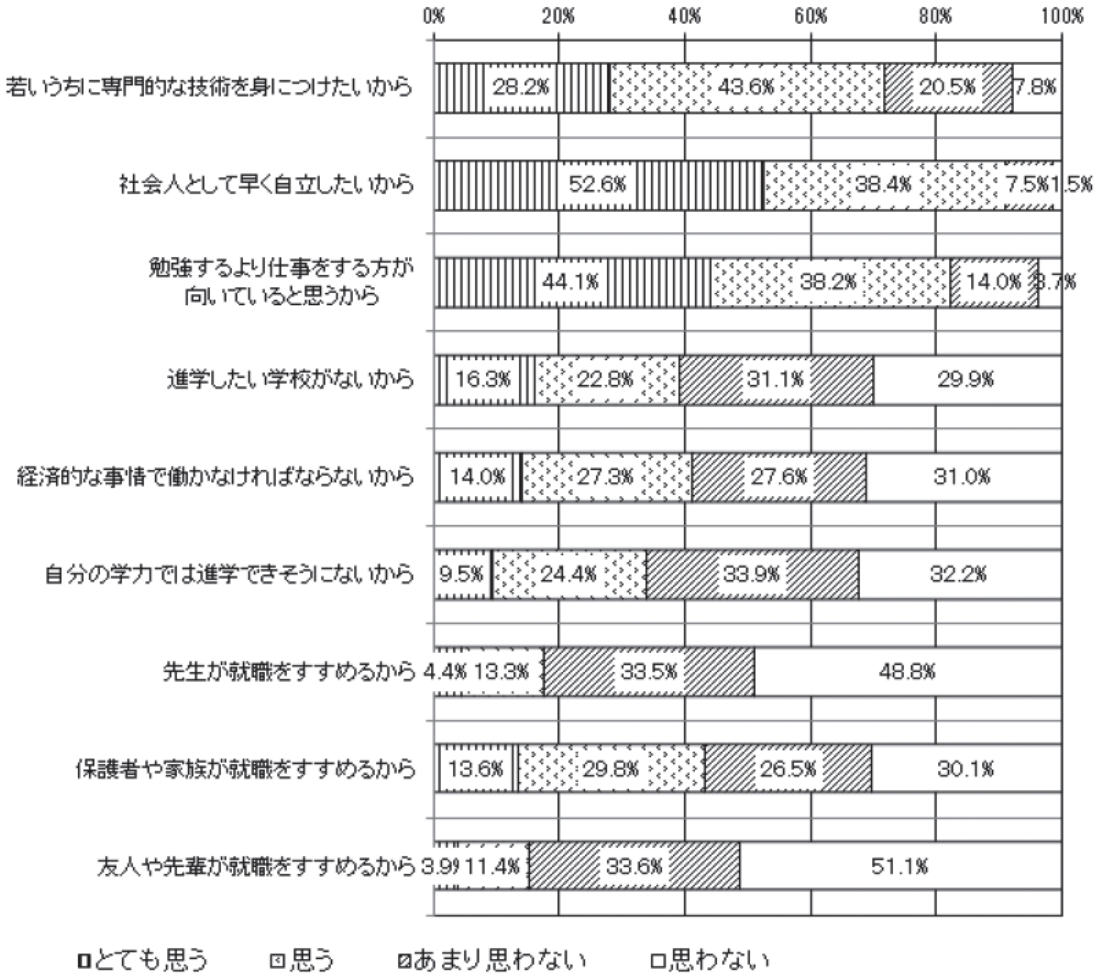
⑦　高等学校卒業後すぐに働くことを希望する理由

・高等学校を卒業した後で（進学しないで）働くことを希望する理由は、「社会人として早く自立したいから」と「とても思う」学生の割合が52.6％と最も高い。次いで、「勉強するより仕事をする方が向いていると思うから」が44.1％、「若いうちに専門的な技術を身につけたいから」が28.2％等である。

・「思う」と合せても上位3つの順位は同じで、「保護者や家族が就職をすすめるから」が43.4％、「経済的な事情で働かなければならないから」が41.3％である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【高等学校を卒業した後すぐに働くことを希望する理由】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

⑧　自分の職業や仕事を選ぶ際に重視すること

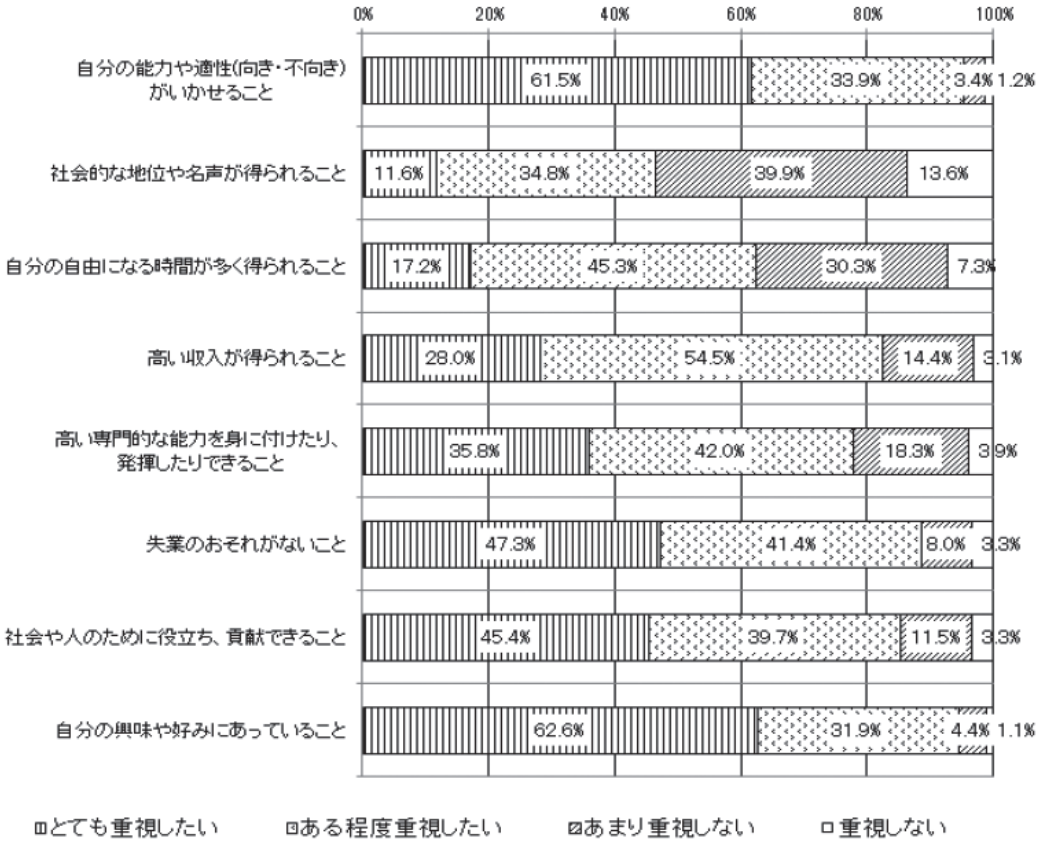
・「とても重視したい」について、「自分の興味や好みにあっていること」が 62.6%、「自分の能力や適性（向き・不向き）がいかせること」が 61.5%、「失業のおそれがないこと」が 47.3%、「社会や人のために役立ち、貢献できること」が 45.4%等である。

・「ある程度重視したい」も含めると、「自分の能力や適性（向き・不向き）がいかせること」が最も高く 95.4%である。次いで、「自分の興味や好みにあっていること」が 94.5%、「失業のおそれがないこと」が 88.7%、「社会や人のために役立ち、貢献できること」が 85.1%、「高い収入が得られること」が 82.5%等である。

・逆に、「社会的な地位や名声が得られること」は、「あまり重視しない」「重視しない」生徒の合計が 53.5%である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「
キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【自分の職業や仕事を選ぶ際に重視すること】



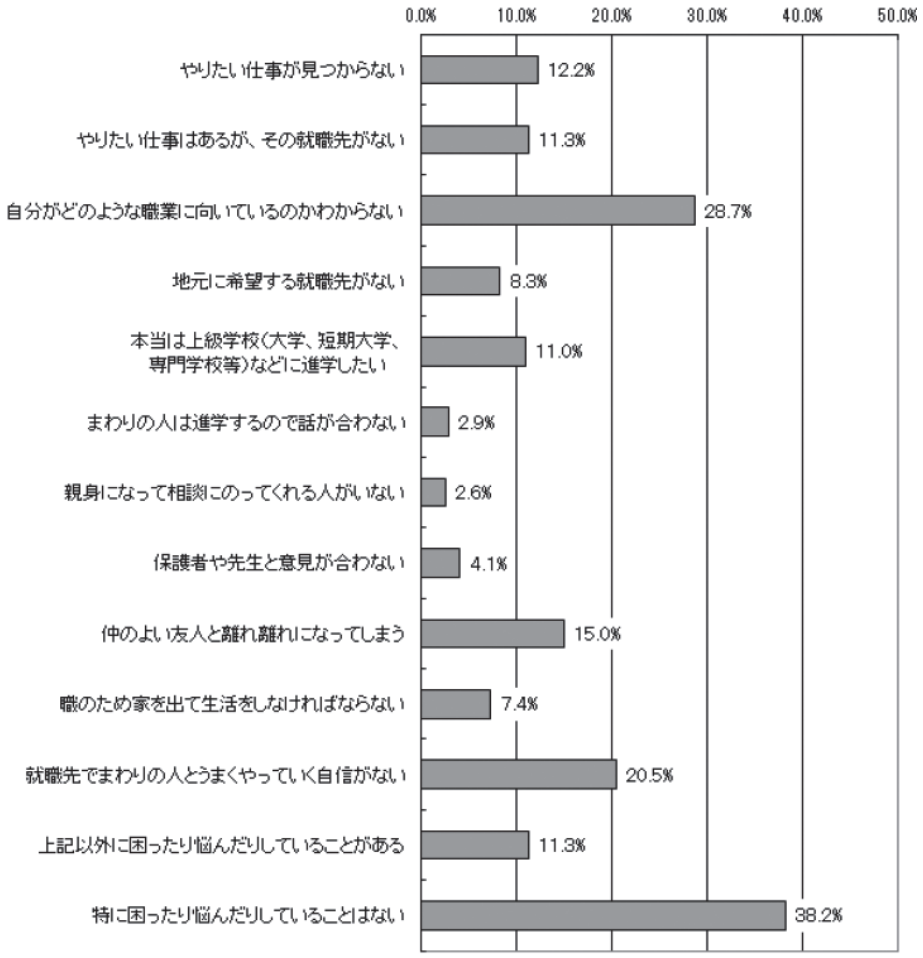
（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

⑨　就職等を希望するにあたって困ったり悩んだりしていること

・「特に困ったり悩んだりしていることはない」が 38.2％と最も高い。次いで「自分がどのような職業に向いているのかわからない」が 28.7％、「就職先でまわりの人とうまくやっていく自信がない」が 20.5％等である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【就職や家事への従事等を希望するにあたって困ったり悩んだりしていること】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

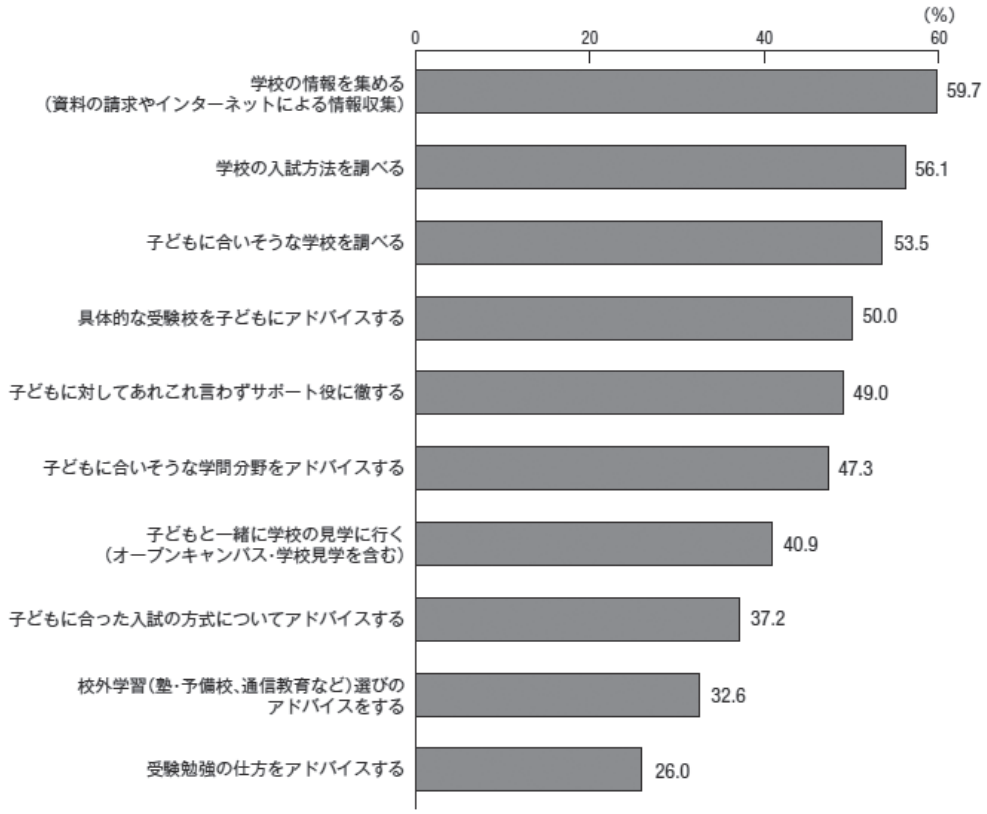
⑩　子どもの進路選択に対する保護者の関与

・子どもの進路選択に関して親がしていることは、「学校の情報を集める（資料の請求やインターネットによる情報収集）」が 59.7%、「学校の入試方法を調べる」が 56.1%、「子どもに合いそうな学校を調べる」が 53.5%、「具体的な受験校を子どもにアドバイスする」が 50.0%等である。

・「受験勉強の仕方をアドバイスする」は 26.0%と最も比率が低い。

（参考：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月を基に作成）

【こどもの進路選択に関して親がしていること】



注1）「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の%。選択肢は「とてもあてはまる」「まああてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の5段階。
注2）対象は子どもに大学進学を希望する高校1～3年生の保護者 3,297 人。

（資料出所：ベネッセ教育総合研究所「高等学校データブック 2013」2013年3月）

3　高校生の進路

①　進路先（現役生）

・高等学校卒業者の「大学・短期大学進学率」は、2010年の 54.3％をピークにここ 3年は微減し、2013年3月卒では 53.2％である。

・「就職率」は 3年連続で上昇し、2013年は 16.9％、「専門学校進学率」はここ 4年間連続で上昇し、2013年は 17.0％である。

・「一時的な仕事に就いた者」と「進学も就職もしていない者」の合計は、2013年は 67,563人であり、卒業者全体のうち 6.2％、就職者のうち 36.6％を占める。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【高等学校職業者の状況】

（人(%)）

区　分	卒業者	大学・短大進学者(率)	うち大学(学部)進学者(率)	専門学校進学者(率)	就職者(率)	一時的な仕事に就いた者(率)	進学も就職もしていない者(率)	不詳・死亡
平成16年3月	1,235,482	560,055 (45.3)	459,456 (37.2)	237,279 (19.2)	208,907 (16.9)	27,003 (2.2)	92,666 (7.5)	216
17年3月	1,203,251	568,710 (47.3)	473,263 (39.3)	228,867 (19.0)	208,747 (17.3)	22,855 (1.9)	78,922 (6.6)	267
18年3月	1,172,087	578,525 (49.4)	490,242 (41.8)	213,122 (18.2)	210,442 (18.0)	19,232 (1.6)	66,434 (5.7)	140
19年3月	1,148,108	587,999 (51.2)	505,951 (44.1)	193,156 (16.8)	212,635 (18.5)	16,358 (1.4)	59,962 (5.2)	410
20年3月	1,089,188	575,659 (52.9)	500,631 (46.0)	167,092 (15.3)	206,628 (19.0)	12,862 (1.2)	53,757 (4.9)	230
21年3月	1,065,412	574,333 (53.9)	503,840 (47.3)	156,363 (14.7)	193,615 (18.2)	13,592 (1.3)	54,678 (5.1)	158
22年3月	1,071,422	582,272 (54.3)	513,013 (47.9)	170,352 (15.9)	168,727 (15.7)	15,560 (1.5)	59,703 (5.6)	299
23年3月	1,064,074	573,679 (53.9)	507,509 (47.7)	172,200 (16.2)	173,566 (16.3)	14,994 (1.4)	56,965 (5.4)	369
24年3月	1,056,387	565,779 (53.6)	503,545 (47.7)	177,486 (16.8)	176,931 (16.7)	13,892 (1.3)	51,922 (4.9)	283
25年3月	1,091,617	581,138 (53.2)	517,398 (47.4)	185,546 (17.0)	184,702 (16.9)	13,624 (1.2)	53,939 (4.9)	302

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

② 高等学校学科別進路先

・普通科卒業者は、大学等進学率と専修学校専門課程の占める割合が高い。

・専門高等学校卒業者のうち、工業科卒業者は、就職者の比率が高く、左記以外の者の比率が低い。商業科では卒業者の約4人に1人、総合学科では卒業者の約3人に1人が大学等に進学している。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【学科別状況別卒業者数】

（人（%））

区分	計	大学等進学	専修学校専門課程	公共職業能力開発施設	就職	一時的な仕事	左記以外
普通科	794,222	494,163 (62.2)	122,361 (15.4)	3,486 (0.4)	64,041 (8.1)	9,284 (1.2)	42,441 (5.3)
工業科	82,404	12,302 (14.9)	12,270 (14.9)	1,684 (2.0)	52,119 (63.2)	906 (1.1)	2,088 (2.5)
商業科	70,149	17,997 (25.7)	18,554 (26.4)	339 (0.5)	28,367 (40.4)	1,284 (1.8)	2,372 (3.4)
総合学科	55,450	19,561 (35.3)	15,878 (28.6)	632 (1.1)	14,098 (25.4)	1,151 (2.1)	2,850 (5.1)

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）2013年8月」を基礎に事務局が編集）

③　都道府県別の進路先

・2013年3月卒業者の全国平均の大学等進学率は 53.2%（大学（学部）進学率は 47.3%）、専修学校（専門課程）進学率は 17.0%、就職率は 17.0%である。

・大都市圏（関東の一都三県、近畿の二府等）では、全国平均よりも大学等進学率が高く、就職率が低くなっているのに対し、東北・山陰・九州（福岡県を除く）では、全国平均よりも専修学校進学率と就職率が高く、大学等進学率が低いという傾向がある。

・就職者総数のうち、県外（出身高等学校が所在する県以外の県）へ就職した者は 33,311人で、就職者総数の 18.0%を占めている（ちなみに、2013年3月卒で大学等に進学した者のうち、他県（出身高等学校が所在する県以外の県）の大学に入学した者の比率は 57.7%で、性別では男子が 59.6%、女子が 55.2%となっている）。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【高等学校卒業者の都道府県別進学率と就職率】

区分	大学等進学率(%)	大学（学部）進学率(%)	専修学校（専門課程）進学率(%)	就職率(%)	区分	大学等進学率(%)	大学（学部）進学率(%)	専修学校（専門課程）進学率(%)	就職率(%)
北海道	39.9	34.2	22.7	22.0	京都	64.8	58.5	14.4	8.4
青森	41.4	34.0	15.4	31.9	大阪	57.7	50.9	15.0	11.2
岩手	40.4	33.8	21.3	29.9	兵庫	59.6	54.1	14.2	13.2
宮城	48.0	43.9	17.8	23.3	奈良	57.8	51.0	14.0	10.9
秋田	43.0	35.6	18.4	29.5	和歌山	47.6	41.1	17.5	20.6
山形	44.4	37.9	19.2	28.2	鳥取	42.3	32.8	17.6	23.8
福島	43.3	37.2	20.3	28.5	島根	46.0	37.2	23.2	22.0
茨城	49.3	45.7	18.4	20.0	岡山	51.0	44.5	16.6	21.2
栃木	52.3	47.2	17.6	19.8	広島	60.4	55.0	13.7	13.8
群馬	51.2	45.6	20.2	17.9	山口	41.4	35.2	17.7	27.8
埼玉	56.5	51.3	17.7	13.2	徳島	50.5	45.1	16.8	21.7
千葉	53.8	49.3	18.5	12.5	香川	49.3	42.2	18.1	18.8
東京	65.2	62.0	13.0	5.9	愛媛	50.4	43.4	18.5	21.6
神奈川	60.2	55.5	16.1	7.7	高知	44.4	36.5	21.9	17.8
新潟	45.0	39.4	28.4	17.3	福岡	52.0	44.6	15.8	17.2
富山	52.4	43.5	18.0	20.6	佐賀	41.8	35.2	17.8	31.0
石川	53.9	46.5	14.7	20.9	長崎	41.9	36.4	17.9	29.6
福井	52.8	44.1	15.3	23.5	熊本	43.6	37.5	19.1	25.3
山梨	57.4	51.3	16.9	15.1	大分	45.5	35.4	21.0	26.2
長野	47.8	38.0	22.9	16.4	宮崎	42.4	34.3	17.5	29.7
岐阜	55.2	47.4	14.3	22.6	鹿児島	41.4	29.3	20.8	26.5
静岡	53.1	47.9	16.5	21.3	沖縄	38.2	34.4	26.4	15.2
愛知	58.3	52.8	12.9	17.7	全国	53.2	47.3	17.0	17.0
三重	50.9	44.6	14.6	25.2	男	50.9	49.7	13.6	20.3
滋賀	56.2	49.3	16.4	16.6	女	55.5	44.9	20.5	13.6

（注）大学等進学率は，大学・短期大学の通信教育部への進学者を含む。

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

④　大学入学時の選抜状況

・2012年4月における大学（学部）入学者594,358人のうち、一般入試（学力選抜）で入学した者は 333,889人（全体の 56.2%）である。

・設置者別にみると、2012年4月大学入学者のうち、私立大学では 50.9%、公立大学では 26.7%、国立大学では 15.9%が、入学に際して、「学力選抜」を受けていない。

（参考：文部科学省「平成24年度国公私立大学入学者選抜実施状況」2012年10月を基に作成）

【選抜毎の実施状況（一般入試）】

区　分	募集人員 A	入学志願者数 B	志願倍率 B／A	受験者数	合格者数	入学者数 C	過△欠員 C－A
	人	人	倍	人	人	人	
国立大学	（ 80,627 ） 80,670	（ 370,551 ） 367,665	（ 4.6 ） 4.6	（ 289,154 ） 269,331	（ 93,543 ） 91,670	（ 84,630 ） 84,097	（ 4,003 ） 3,427
公立大学	（ 20,216 ） 20,456	（ 138,102 ） 133,534	（ 6.8 ） 6.5	（ 104,593 ） 97,186	（ 29,297 ） 29,478	（ 21,644 ） 21,815	（ 1,428 ） 1,359
小計	（ 100,843 ） 101,126	（ 508,653 ） 501,199	（ 5.0 ） 5.0	（ 393,747 ） 366,517	（ 122,840 ） 121,148	（ 106,274 ） 105,912	（ 5,431 ） 4,786
私立大学	（ 246,657 ） 249,610	（ 2,775,854 ） 2,787,414	（ 11.3 ） 11.2	（ 2,665,744 ） 2,667,381	（ 793,323 ） 838,090	（ 227,448 ） 227,977	（ △19,209 ） △21,633
合計	（ 347,500 ） 350,736	（ 3,284,507 ） 3,288,613	（ 9.5 ） 9.4	（ 3,059,491 ） 3,033,898	（ 916,163 ） 959,238	（ 333,722 ） 333,889	（ △13,778 ） △16,847

（資料出所：文部科学省「平成24年度国公私立大学入学者選抜実施状況」2012年10月）

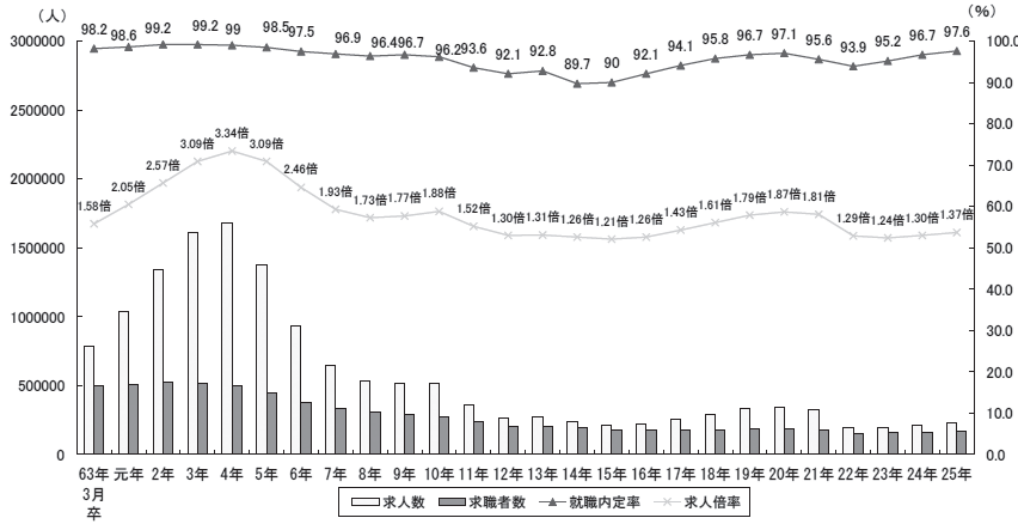
⑤　高等学校卒就職者に対する求人数・求職者数、求人倍率・就職内定率の推移

・1992年3月卒では 167.6万人あった高等学校卒業者に対する求人数（求職者数50.2万人、求人倍率3.34倍）が、2002年3月卒では 24.1万人（求職者数19.1万人、求人倍率1.26倍）、2013年3月卒では 22.7万人（求職者数16.6万人、求人倍率1.37倍）になる等、高等学校新卒者に対する求人数が減少している。

・就職内定率は、1993年3月卒で 98.5％であったが、2003年3月卒では 90.0％、2013年3月卒では 97.6％となっている。

（参考：厚生労働省「平成24年度『高等学校・中学新卒者の求人・求職・内定状況』取りまとめ」2013年5月を基に作成）

【高等学校新卒者の求人倍率・就職内定率の推移（3 月末現在）】



（資料出所：厚生労働省「平成24年度『高等学校・中学新卒者の求人・求職・内定状況』取りまとめ」2013年5月）

⑥　就職者の産業別就職者数

・就職者総数を産業別にみると、「製造業」が 65,934人（就職者の 35.7％）で最も多く、次いで「卸

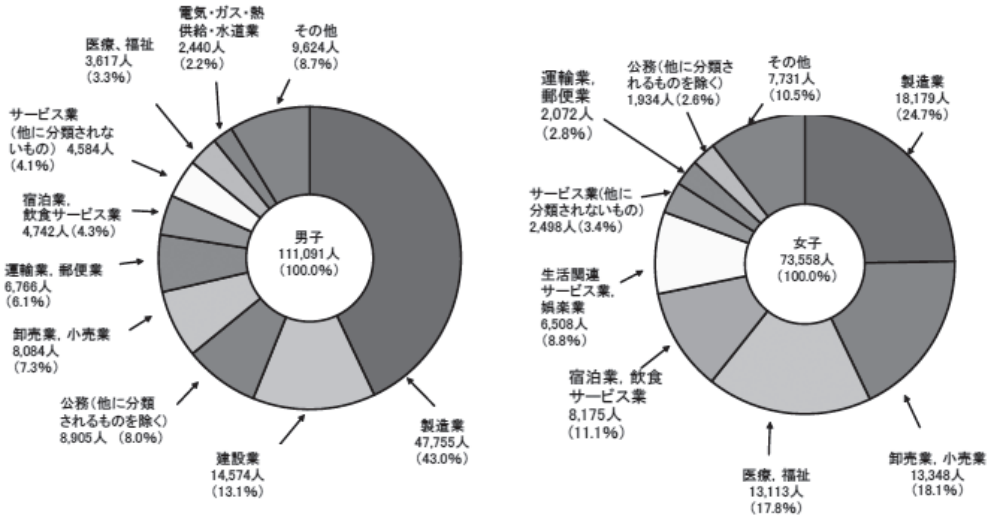
売業、小売業」が 21,432人（同11.6％）、「医療、福祉」が 16,730人（同9.1％）、「宿泊業、飲食サービス業」が 12,917人（同7.0％）である。

・男子の就職者111,091人のうち、製造業が 47,755人（43.0％）、建設業が 14,574人（13.1％）、公務（他に分類されるものを除く）が 8,905人（8.0％）、卸売業、小売業が 8,084人（7.3％）、運輸業、郵便業が 6,766人（6.1％）等の順である。

・女子の就職者73,558人のうち、製造業が 18,179人（24.7％）、卸売業、小売業が 13,348人（18.1％）、医療、福祉が 13,113人（17.8％）、宿泊業、飲食サービス業が 8,175人（11.1％）、生活関連サービス業、娯楽業が 6,508人（8.8％）等の順である。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【高等学校卒業者の男女別にみた主な産業別就職者数の比率】



（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

⑦　就職者の職業別就職者数

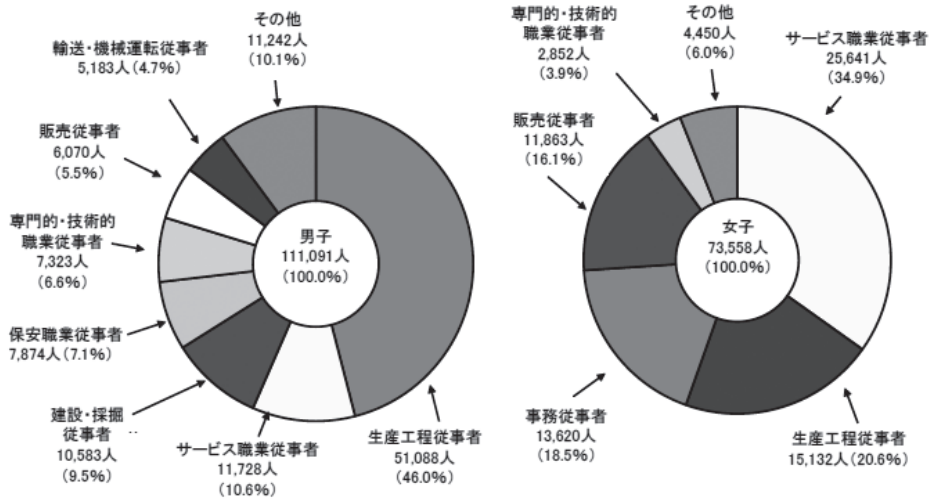
・就職者総数を職業別にみると、「生産工程従事者」が 66,220人（就職者総数の 35.9％）で最も多く、次いで「サービス職業従事者」が 37,369人（同20.2％）、「販売従事者」が 17,933人（同9.7％）、「事務従事者」が 16,727人（同9.1％）等である。

・男子の就職者は、生産工程従事者が 51,088人（46.0％）、サービス職業従事者が 11,728人（10.6％）、建設・採掘従事者が 10,583人（9.5％）、保安職業従事者が 7,874人（7.1％）、専門的・技術的職業従事者が 7,323人（6.6％）等の順である。

・女子の就職者は、サービス職業従事者が、25,641人（34.9％）、生産工程従事者が 15,132人（20.6％）、事務従事者が 13,620人（18.5％）、販売従事者が 11,863人（16.1％）等の順である。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【高等学校卒業者の男女別にみた主な職業別就職者数の比率】



（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

⑧　新規高卒就業者の産業別離職状況

・新規高卒就業者（2009年3月卒）の 3年以内の離職率は、35.7% である。

・産業分類別（大分類）卒業3年後の離職率を 2013年4月新規高卒就職者の多い順でみると、製造業が 24.4%、卸売業が 40.1%、小売業が 49.1%、医療、福祉が 47.2%、宿泊業、飲食サービス業が 67.7% 等となっている。

◆第２節　高等教育機関等での教育と社会への移行における課題の理解

１　高等教育機関等での教育

①　関係学科別学部学生の比率（4 年制大学）

・2013年度における 4年制大学学生の関係学科別学生数の比率は、高い順に、社会科学33.1％、工学15.2％、人文科学14.7％となっているが、近年、これらの学科の比率が低下し、教育、薬学の学生構成比が上昇している。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【関係学科別学生の構成比の推移（4 年制大学）】

区　分	関係学科別学生の構成比										
	計	人文科学	社会科学	理学	工学	農学	医・歯学	薬学	家政	教育	その他
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
平成15	100.0	16.3	39.0	3.5	17.8	2.8	2.5	1.6	2.1	5.5	8.8
20	100.0	15.6	35.8	3.3	16.3	3.0	2.5	2.2	2.6	6.1	12.7
21	100.0	15.4	35.3	3.2	16.0	3.0	2.5	2.1	2.6	6.3	13.4
22	100.0	15.2	34.9	3.2	15.7	3.0	2.5	2.4	2.7	6.5	14.0
23	100.0	15.0	34.2	3.2	15.4	2.9	2.6	2.8	2.7	6.7	14.5
24	100.0	14.8	33.7	3.2	15.2	3.0	2.6	2.9	2.7	7.0	15.0
25	**100.0**	**14.7**	**33.1**	**3.1**	**15.2**	**3.0**	**2.7**	**2.9**	**2.8**	**7.2**	**15.3**

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

②　関係学科別学生数の比率（短期大学本科生）

・2013年度における短期大学本科生の関係学科別学生数の比率は、高い順に、教育が 36.2％、家政が 18.9％、社会が 9.8％、保健が 9.7％となっている。

・近年、人文、社会、工業、家政の比率が低下し、教育の比率が上昇している。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【関係学科別学生数の比率の推移（短期大学本科生）】

区　分	計	人文	社会	教養	工業	農業	保健	家政	教育	その他
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
平成15	100.0	15.1	13.4	2.0	4.3	1.1	9.7	22.5	25.6	6.2
20	100.0	12.4	12.0	1.4	3.5	0.8	7.6	20.8	29.8	11.7
21	100.0	12.4	11.9	1.4	3.1	0.9	8.0	20.5	29.6	12.2
22	100.0	11.8	11.9	1.4	3.0	0.9	8.3	20.1	30.4	12.1
23	100.0	10.9	11.0	1.4	2.9	0.9	9.0	19.5	33.1	11.3
24	100.0	10.1	10.0	1.5	2.7	1.0	9.5	18.9	35.6	10.6
25	**100.0**	**9.2**	**9.8**	**1.9**	**2.7**	**1.0**	**9.7**	**18.9**	**36.2**	**10.6**

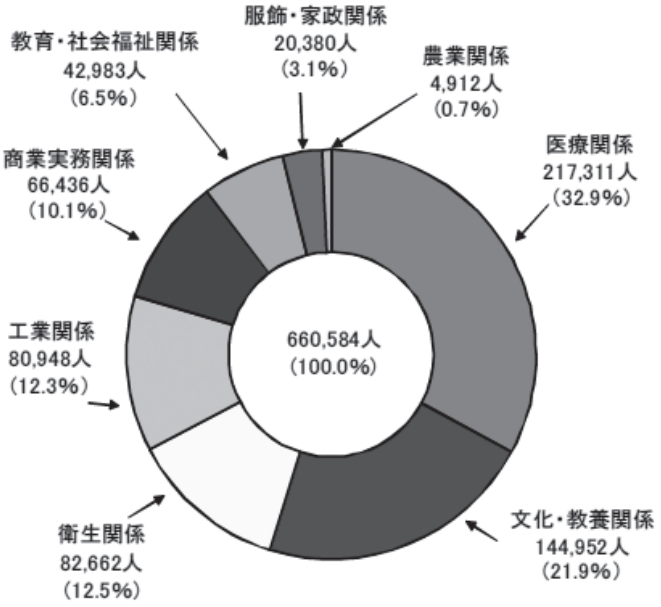
（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

③　専修学校の専攻分野別生徒数

・専修学校の生徒数を分野別にみると、「医療関係」が 217,311人（全生徒数の 32.9％）と最も多

く、次いで「文化・教養関係」が 144,952人（同21.9%）、「衛生関係」が 82,662人（同12.5%）、「工業関係」が 80,948人（同12.3%）等である。
（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【専修学校の分野別生徒数】



（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

④　高等技術専門校での教育

・高等学校卒業者を対象として、高度職業訓練を行う 2年制の専門課程（2800時間）を置く公共職業能力開発施設は、職業能力開発大学校（10校）と職業能力開発短期大学校等（26校）があり、制度上、機械システム系、電子情報制御システム系、居住システム系等、29 の専攻科が存在している。
・2013年3月高等学校卒業者のうち、公共職業能力開発施設等に入学したのは 6,850人である。

（参考：厚生労働省ホームページ「学卒者訓練の概要」
http://www.mhlw.go.jp/bunya/nouryoku/gakusotu/index.html
及び文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

２　卒業生の進路

①　大学学部卒業者の状況別推移

・2013年3月大学学部卒業者を状況別にみると、卒業者558,853人のうち、「進学者」が 72,821人（全卒業者の 13.0%）、「就職者」が 375,959人（同67.3%）、「一時的な仕事に就いた者」が 16,850人（同3.0%）、「左記以外の者」が 75,928人（同13.6%）等である。
・卒業者のうち、「正規の職員でない者」「一時的な仕事に就いた者」「就職も進学もしていない者」を合算すると、115,564人となり、安定的な雇用に就いていない者の卒業者に占める割合は 20.7%（前年度は 22.9%）である。
（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【大学（学部）卒業後の状況】

（人（％））

区　分	卒業者	進学者(率)	就職者（率）	うち正規の職員等でない者（率）①	一時的な仕事に就いた者（率）②	進学も就職もしていない者（率）③	不詳・死亡(率)	安定的な雇用に就いていない者(率) ①+②+③
平成16年3月	548,897	77,022 (14.0)	306,414 (55.8)	… …	24,754 (4.5)	110,035 (20.0)	22,699 (4.1)	… …
17年3月	551,016	78,169 (14.2)	329,125 (59.7)	… …	19,507 (3.5)	97,994 (17.8)	18,398 (3.3)	… …
18年3月	558,184	79,337 (14.2)	355,820 (63.7)	… …	16,659 (3.0)	82,009 (14.7)	15,108 (2.7)	… …
19年3月	559,090	77,165 (13.8)	377,776 (67.6)	… …	13,287 (2.4)	69,296 (12.4)	12,503 (2.2)	… …
20年3月	555,690	76,343 (13.7)	388,480 (69.9)	… …	11,485 (2.1)	59,791 (10.8)	10,803 (1.9)	… …
21年3月	559,539	78,265 (14.0)	382,485 (68.4)	… …	12,991 (2.3)	67,894 (12.1)	8,904 (1.6)	… …
22年3月	541,428	86,039 (15.9)	329,190 (60.8)	… …	19,332 (3.6)	87,174 (16.1)	10,807 (2.0)	… …
23年3月	552,358	82,657 (15.0)	340,217 (61.6)	… …	19,107 (3.5)	88,007 (15.9)	13,521 (2.4)	… …
24年3月	558,692	76,856 (13.8)	357,088 (63.9)	21,993 (3.9)	19,569 (3.5)	86,566 (15.5)	9,797 (1.8)	128,128 (22.9)
25年3月	558,853	72,821 (13.0)	375,959 (67.3)	22,786 (4.1)	16,850 (3.0)	75,928 (13.6)	8,523 (1.5)	115,564 (20.7)
			(チ)					(ト)

（注）1 卒業者数は，表章された内訳のほか，臨床研修医（予定者含む）（平成25年度8，870人）を含めた合計。
2 「就職者」とは，給料，賃金，報酬，その他の経常的な収入を得る仕事（自家・自営業を含む）に就いた者をいう。
なお，就職者には，「大学院等への進学者のうち就職している者」（98人）を含む。
3 就職者のうち，「正規の職員等でない者」とは，雇用の期間が1年以上で期間の定めのある者で，かつ1週間の所定労働時間が30～40時間の者をいう。（P9参照）

4 進学率 ＝ 大学院研究科，大学学部，短期大学本科，大学・短期大学の専攻科，別科，専修学校，外国の学校へ入学した者 ／ 各年3月の大学学部卒業者

5 就職率 ＝ 就職者 ／ 各年3月の大学学部卒業者

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

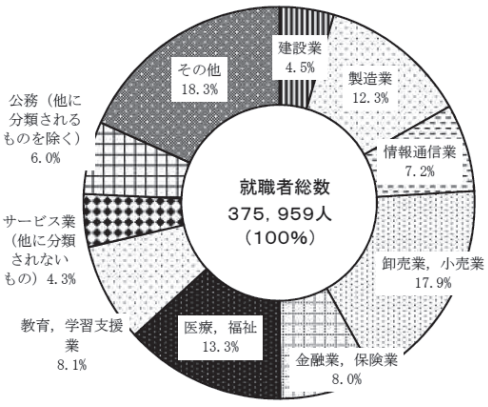
② 大学学部卒業生の産業別就職者数

・2013年3月就職者総数を産業別にみると、「卸売業、小売業」が 67,152人で 17.9％と最も高く、次いで「医療、福祉」が 50,063人で 13.3％、「製造業」が 46,212人で 12.3％、「教育、学習支援業」が 30,622人で 8.1％等の順である。

・男女別では、男子は「卸売業、小売業」が 18.6％、「製造業」が 15.6％、「情報通信業」が 8.6％等の順であり、女子は「医療、福祉」が 20.3％、「卸売業、小売業」が 17.1％、「教育、学習支援業」が 10.6％等の順である。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【大学（学部）卒業者の産業別就職者数の比率】



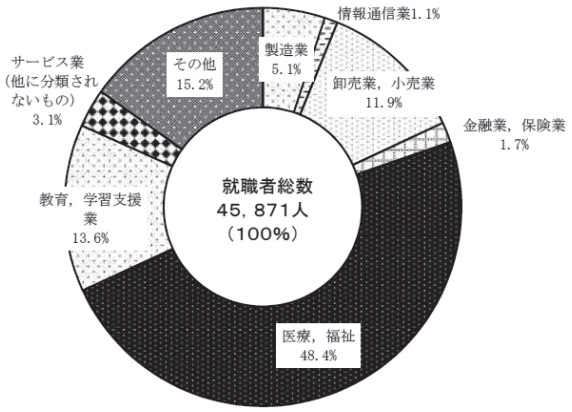
（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

③ 短期大学生の産業別就職者数

・2013年3月短期大学（本科）卒業の就職者総数を産業別にみると、「医療、福祉」が 22,206人で 48.4％と最も高く、次いで「教育、学習支援業」が 6,230人で 13.6％、「卸売業、小売業」が 5,475人で 11.9％等の順である。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【短期大学（本科）卒業者の産業別就職者の比率】



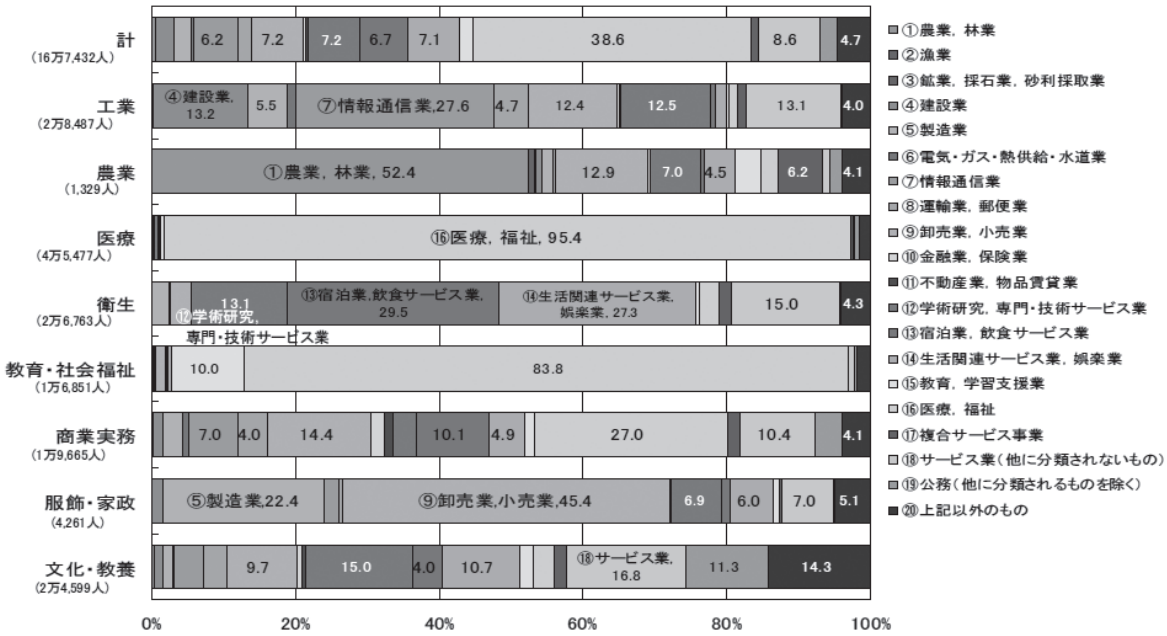
（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

④　専門学校の卒業者

・2008年3月における専門学校卒業者の産業別就職者割合は、「医療、福祉」が38.6％と最も高く、次いで「サービス業（他に分類されないもの）」が8.6％、「卸売業、小売業」と「学術研究、専門・技術サービス業」が7.2％等の順である。

（参考：中教審「今後のキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）2011年1月を基に作成）

【専門学校の関係学科別産業別就職者割合（平成 20 年度）】



（資料出所：中教審「今後のキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）2011年1月）

３　教育と社会の接続における課題

①　大学生の分野別卒業者の状況

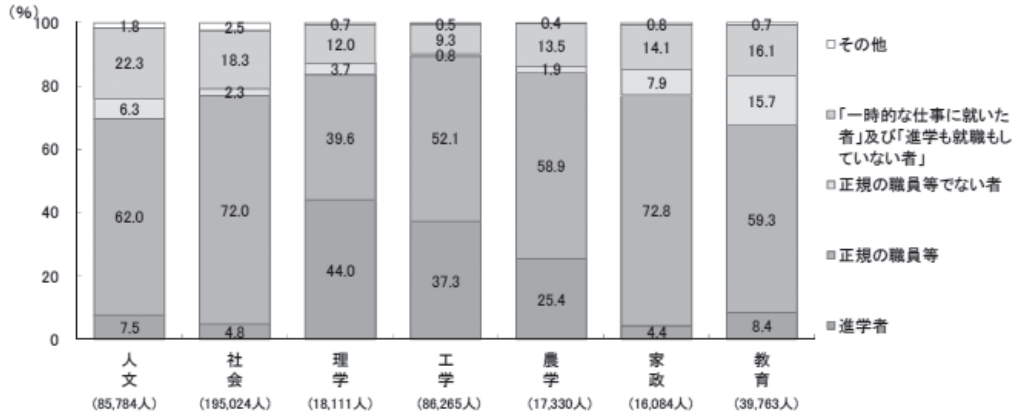
・社会科学系、人文科学系、教育系、家政系の学部では、「安定的な雇用に就いていない者」「正規の職員等でない者」、「一時的な仕事に就いた者」及び「進学も就職もしていない者」の比率

が比較的高い。

・理学系、工学系、農学系では、大学院進学者の比率が高く、「安定的な雇用に就いていない者」の比率が比較的低い。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【大学（学部）卒業者の分野別の卒業者の状況】



（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

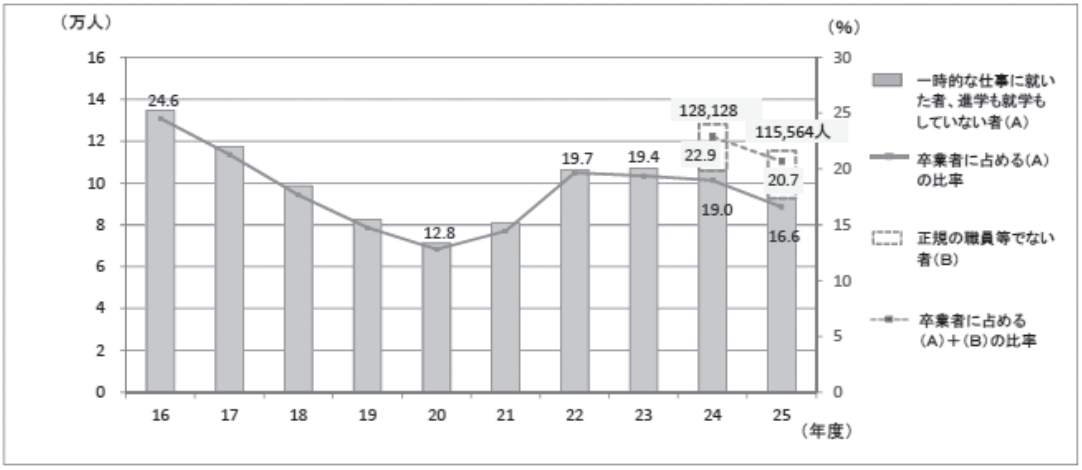
② 大学（学部）卒業時における「安定的な雇用に就いていない者」の問題

・卒業者のうち一時的な仕事に就いた者、進学も就職もしていない者は、2004年度が 24.6％、2008年度が 12.8％、2012年度が 19.0％、2013年度が 16.6％である。

・2013年3月卒では、卒業者のうち一時的な仕事に就いた者、進学も就職もしていない者に正規の職員等でない者を加えると、卒業者の 20.7％が安定的な雇用に就いていない状況である。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月を基に作成）

【一時的な仕事に就いた者、進学も就職もしていない者の推移】



（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

Part2

高等学校の部

第2章

高等学校における
キャリア教育の理解

◆第１節　キャリア教育の理解

１　キャリア教育の系譜

パート１　第2章：中学校におけるキャリア教育の理解　第1節キャリア教育の理解　１キャリア教育の系譜を参照

２「キャリア教育」に関する施策の展開

パート１　第2章：中学校におけるキャリア教育の理解　第1節キャリア教育の理解　２「キャリア教育」に関する施策の展開を参照

３　キャリア教育を通して育成すべき能力についての考え方

①　高等学校段階でのキャリア発達課題

・高等学校では、生徒の個性や義務教育までに培った能力や態度を更に伸長させるとともに、学校から社会・職業への移行の準備として専門性の基礎を育成することが求められる。
・高校生の時期は、中学生と比べて、更に、独立や自律の要求が高まるとともに、所属する集団も増え、集団の規律や社会のルールに従い、互いに協力しながら各自の様々な役割や期待に応えて円滑な人間関係を築いていくことが求められる。
・自我の形成がかなり進み、人間がいかにあるべきか考えるとともに、自己の将来に夢や希望を抱き、その実現を目指して進んで学習に取り組む意欲を持ち、自己の個性や能力を活かす進路を自らの意志と責任で選択し決定していくことが求められる。

（出典：文部科学省『高等学校におけるキャリア教育の手引』2011年11月）

【高等学校段階におけるキャリア発達課題とキャリア発達の特徴の例】

高等学校段階でのキャリア発達課題	
○　キャリア発達段階　→　現実的探索・試行と社会的移行準備の時期 ○　キャリア発達課題 ・自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての勤労観，職業観の確立 ・将来設計の立案と社会的移行の準備 ・進路の現実吟味と試行的参加	
高等学校段階におけるキャリア発達の特徴の例	
入学から在学期間半ば頃まで	在学期間半ば頃から卒業を間近にする頃まで
・　新しい環境に適応するとともに他者との望ましい人間関係を構築する。 ・　新たな環境の中で自らの役割を自覚し，積極的に役割を果たす。 ・　学習活動を通して自らの勤労観，職業観について価値観の形成を図る。 ・　様々な情報を収集し，それに基づいて自分の将来について暫定的に決定する。 ・　進路希望を実現するための諸条件や課題を理解し，検討する。 ・　将来設計を立案し，今取り組むべき学習や活動を理解し実行に移す。	・　他者の価値観や個性を理解し，自分との差異を認めつつ受容する。 ・　卒業後の進路について多面的・多角的に情報を集め，検討する。 ・　自分の能力・適性を的確に判断し，自らの将来設計に基づいて，高校卒業後の進路について決定する。 ・　進路実現のために今取り組むべき課題は何かを考え，実行に移す。 ・　理想と現実との葛藤や経験等を通し，様々な困難を克服するスキルを身に付ける。

（資料出所：文部科学省『高等学校におけるキャリア教育の手引』2011年11月）

② キャリア教育を通して育成すべき「基礎的・汎用的能力」

ⅰ 「総合的な学習の時間」との関連

・高等学校での総合的な学習の時間は、横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すると共に、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすることを目標にしている。

・総合的な学習の時間においては、各教科・科目及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすることが求められる。このような教育活動を通して、自己の在り方生き方を考えることができるようにすることが総合的な学習の時間においては重要である

ⅱ 「特別活動」との関連

・特別活動は、望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養うことを目標とする。

・特別活動、とりわけホームルーム活動は、キャリア教育の中核的な実践の場である。ホームルーム活動を中心として特別活動の全体を通じてキャリア教育を実践するに当たっては、社会の一員としての自己の生き方を探究するなど、人間としての在り方生き方の指導が行われるようにすることが不可欠であり、その際、他の教科等、特に公民科や総合的な学習の時間との関連を図ることが特に求められている。

（参考：文部科学省　国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」2013年3月を基に作成）

◆第２節　高等学校におけるキャリア教育の取組み状況と課題

１　キャリア教育の取組み状況

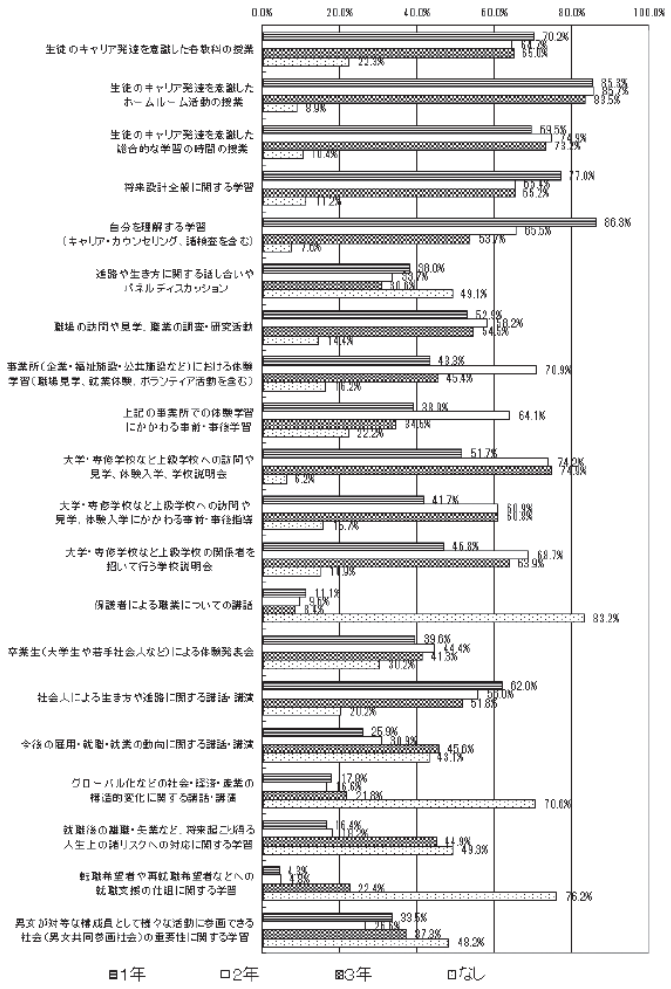
①キャリア教育に関する学習の機会や内容等の実施状況

・全ての学年を通して回答が多いのは、「生徒のキャリア発達を意識したホームルーム活動の授業」（1年が 85.3%、2年が 85.7%、3年が 83.5%）、「生徒のキャリア発達を意識した総合的な学習の時間の授業」（1年が 69.5%、2年が 74.9%、3年が 73.2%）、「将来設計全般に関する学習」（1年が 77.0%、2年が 65.4%、3年が 65.2%）、「自分を理解する学習（キャリア・カウンセリング、諸検査を含む）」（1年が 86.3%、2年が 65.5%、3年が 53.7%）である。

・「なし」の回答は、「保護者による職業についての講話」が 83.2%と最も高い。次いで「転職希望者や再就職希望者などへの就職支援の仕組に関する学習」が 76.2%、「グローバル化など社会・経済・産業の構造的変化に関する講話、講演」が 70.6%、「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習」が 49.3%等である。

（参考：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【キャリア教育に関する学習の機会や内容等の実施状況】



（資料出所：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

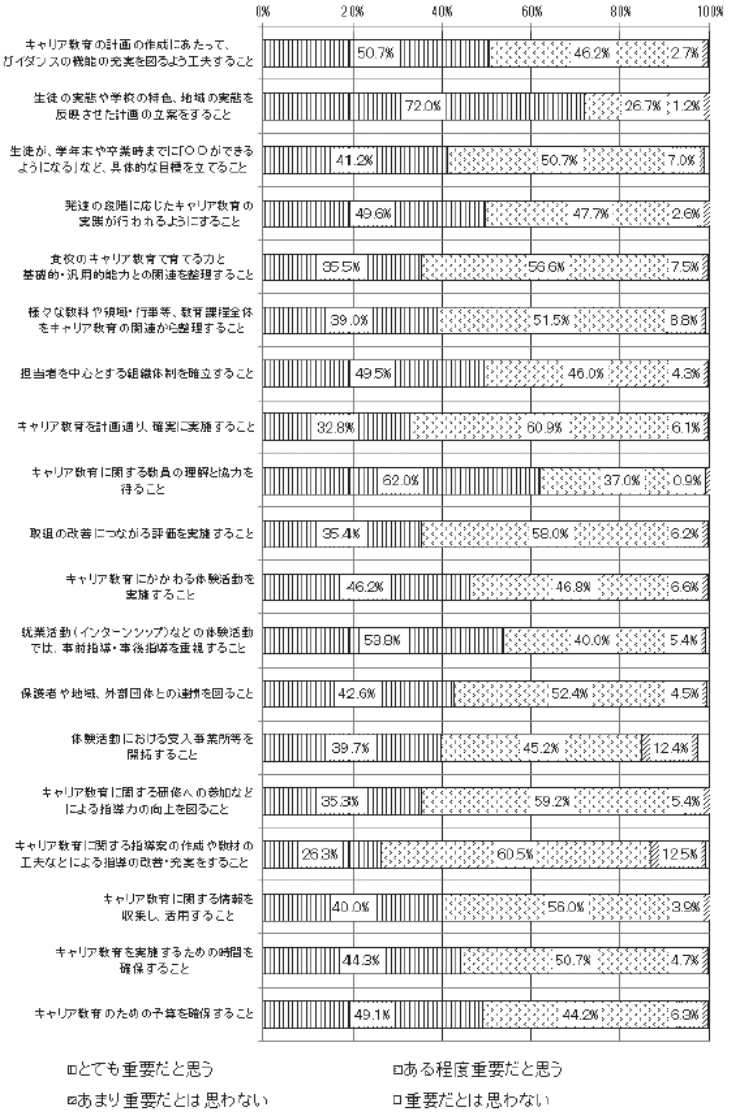
② キャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になると思うこと

・「とても重要だと思う」という回答では、「生徒の実態や学校の特色、地域の実態を反映させた計画の立案をすること」が72.0%と最も高い。次いで「キャリア教育に関する教員の理解と協力を得ること」が62.0%、「就職体験（インターンシップ）などの体験活動では、事前指導・事後指導を重視すること」が53.8%、「キャリア教育の計画の作成にあたって、ガイダンスの機能の充実を図れるように工夫すること」が50.7%、「発達の段階に応じたキャリア教育の実践が行われるようにすること」が49.6%等の順である。

・低いのは、「貴校のキャリア教育で育てる力と基礎的・汎用的能力との関連を整理すること」が35.5%、「取組の改善につながる評価を実施すること」が35.4%、「キャリア教育に関する研修への参加などによる指導力の向上を図ること」が35.3%、「キャリア教育を計画通り、確実に実施すること」が32.8%、「キャリア教育に関する指導案の作成や教材の工夫などによる指導の改善・充実をすること」が26.3%等である。

（参考：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【キャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になると思うこと】



（資料出所：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

③　ホームルームのキャリア教育について困ったり悩んだりしていること

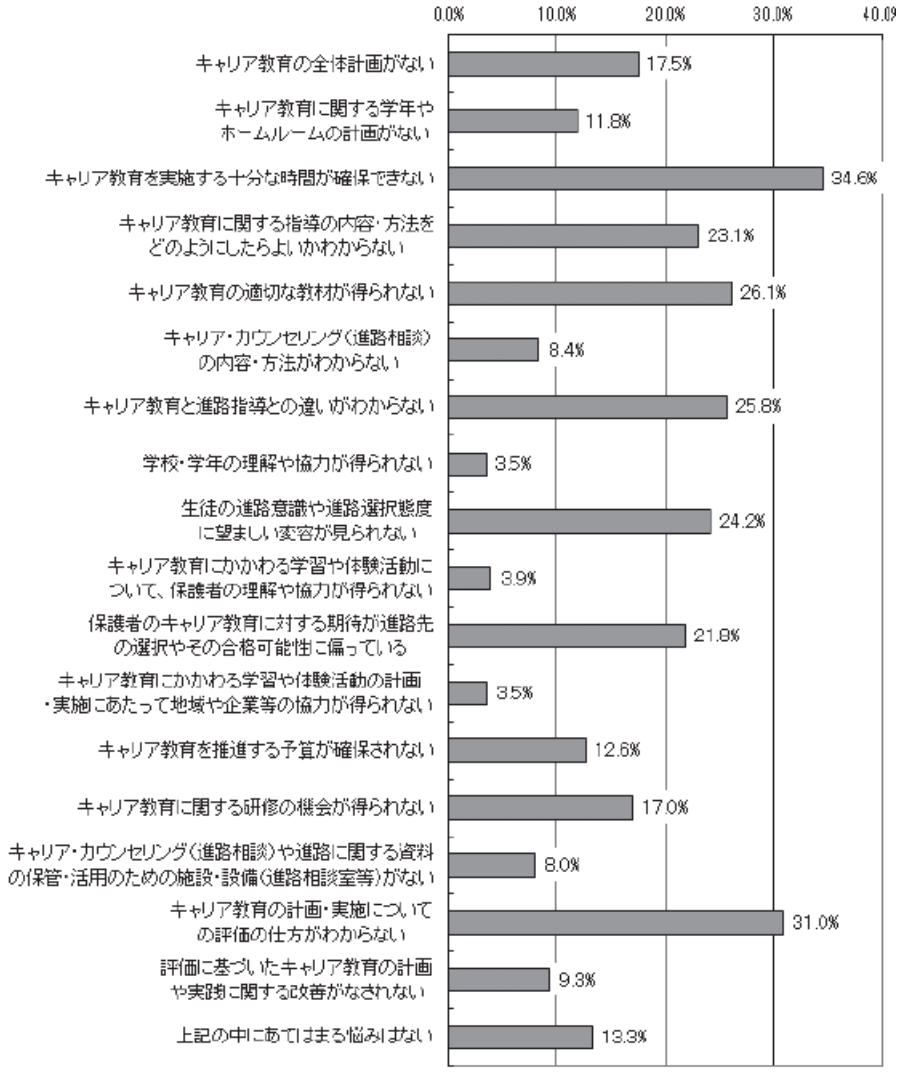
・「キャリア教育を実施する十分な時間が確保できない」が34.6％と最も高い。次いで「キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない」が31.0％、「キャリア教育の適切な教材が得られない」が26.1％、「キャリア教育と進路指導との違いがわからない」が25.8％、「生徒の進路意識や進路選択態度に望ましい変容が見られない」が24.2％、「キャリア教育に関する指導の内容・方法をどのようにしたらよいかわからない」が23.1％、「保護者のキャリア教育に対する期待が進路先の選択やその合格可能性に偏っている」が21.8％等の順である。

・低いのは、「キャリア・カウンセリング（進路相談）の内容・方法が分からない」が8.4％、「キャリア・カウンセリング（進路相談）や進路に関する資料の保管・活用のための施設・設備（進路相談室等）がない」が8.0％、「キャリア教育にかかわる学習や体験活動について、保護者の理解や協力が得られない」が3.9％、「学校・学年の理解や協力が得られない」と「キャリア教育にかかわる学習や体験活動の計画・実施にあたって地域や企業等の協力が得られない」が

3.5％等である。

（参考：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【ホームルームのキャリア教育について困ったり悩んだりしていること】



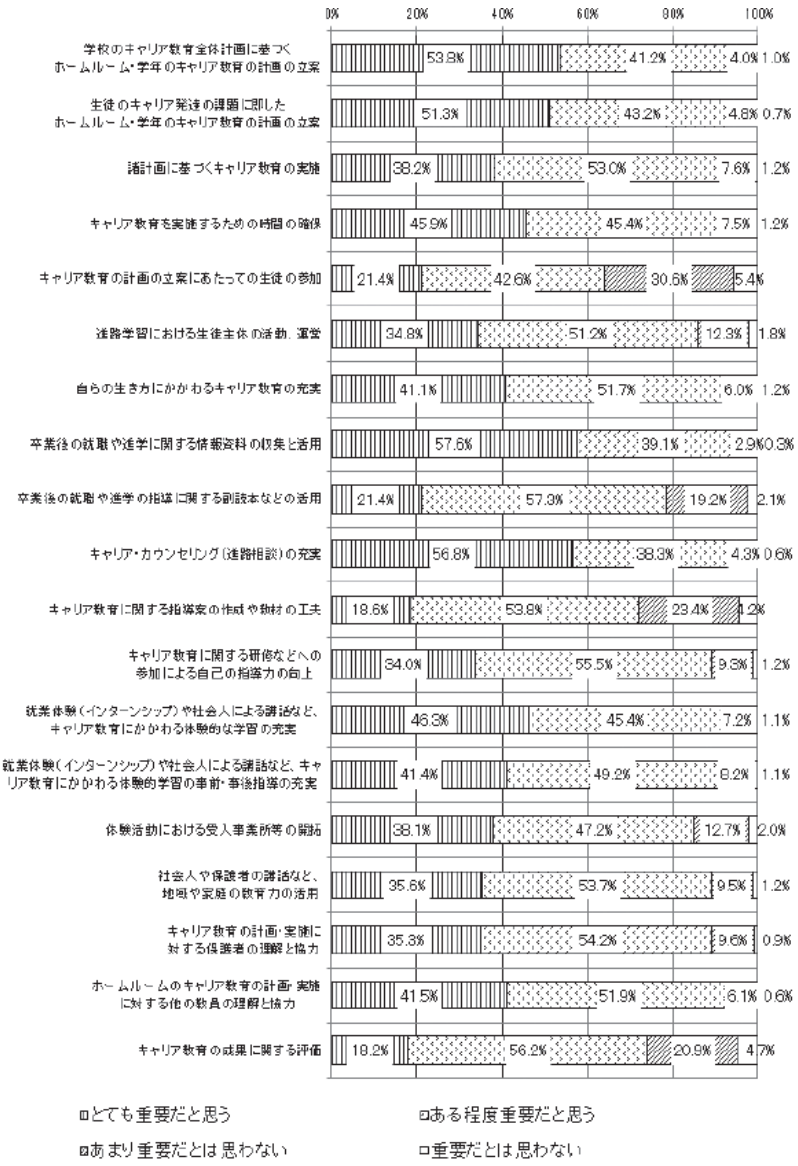
（資料出所：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

④　ホームルームでキャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になること

・「とても重要だと思う」ことは、「卒業後の就職や進学に関する情報資料の収集と活用」が57.6%と最も高い。次いで「キャリア・カウンセリング（進路相談）の充実が56.8%、「学校のキャリア教育全体計画に基づくホームルーム・学年のキャリア教育の計画の立案」が53.8%、「生徒のキャリア発達の課題に即したホームルーム・学年のキャリア教育の計画の立案」が51.3%、「就業体験（インターンシップ）や社会人による講話など、キャリア教育にかかわる体験的な学習の充実」が46.3%等の順である。

（参考：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【キャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になると思うこと】



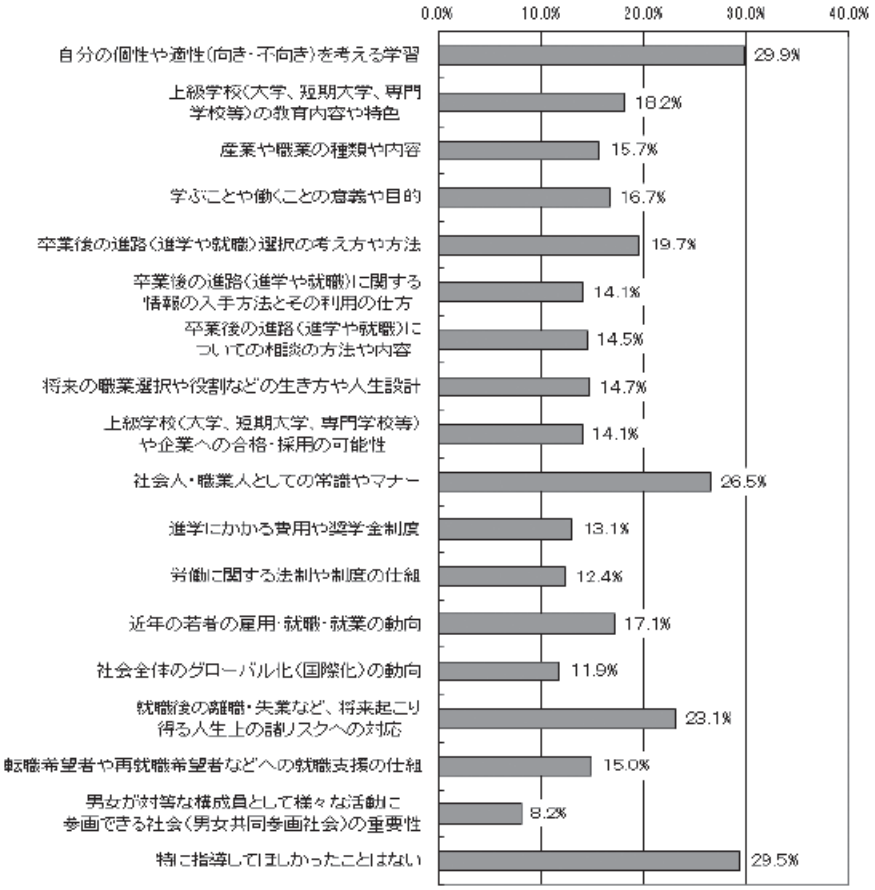
（資料出所：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

⑤　将来の生き方や進路について考えるために指導して欲しかったこと

・「自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習」が29.9％と最も高い。次いで「社会人・職業人としての常識やマナー」が26.5％、「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応」が23.1％等である。

（参考：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【将来の生き方や進路について考えるために指導してほしかったこと】



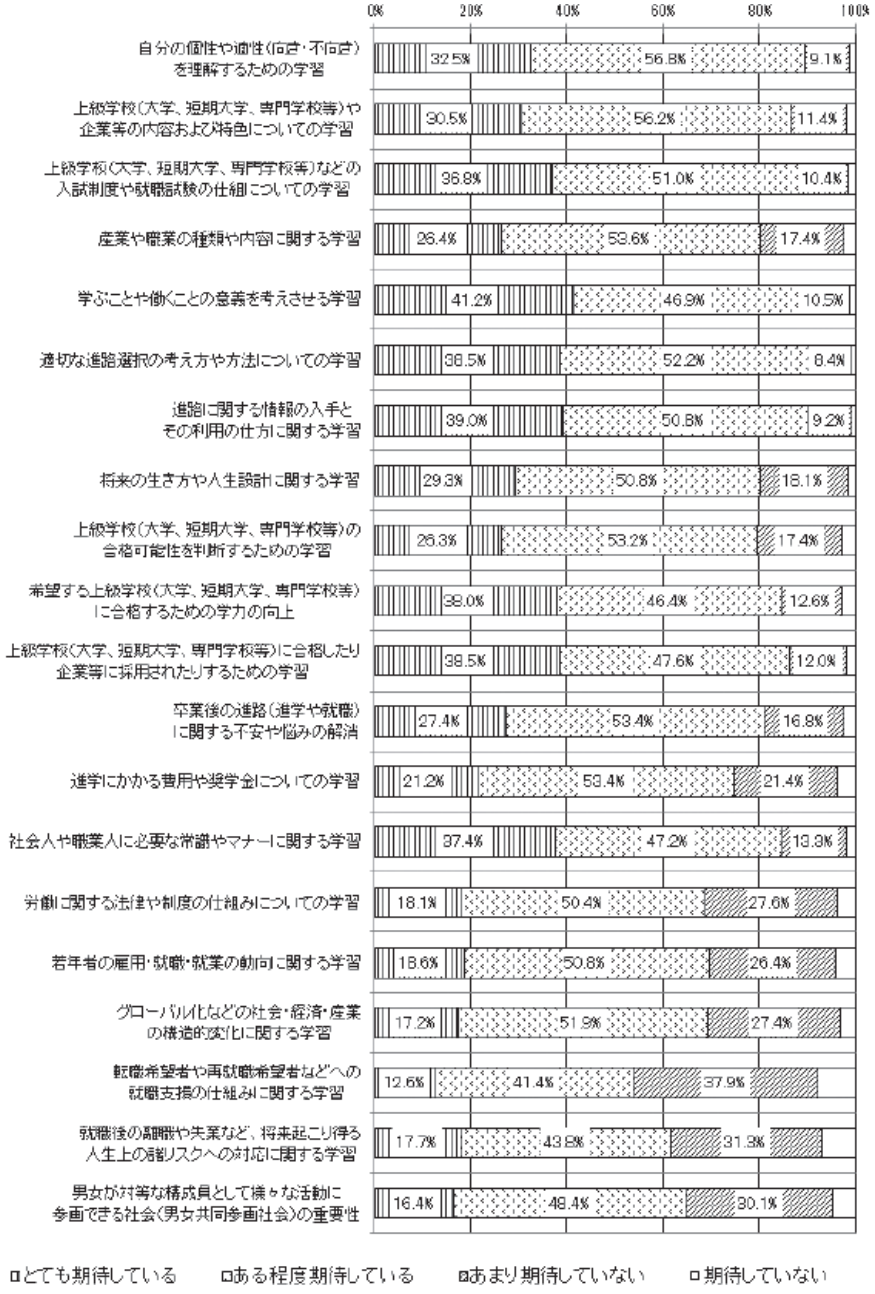
（資料出所：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

⑥　キャリア教育や進路指導において保護者が期待する学習内容

・「とても期待している」と「ある程度期待している」を合わせると、「適切な進路選択の考え方や方法についての学習」が 90.7％と最も高い。次いで「進路に関する情報の入手とその利用の仕方に関する学習」が 89.8％、「自分の個性や適性（向き・不向き）を理解するための学習」が 89.3％、「学ぶことや働くことの意義を考えさせる学習」が 88.1％、「上級学校（大学・短大・専門学校等）などの入試制度や就職試験の仕組についての学習」が 87.8％等の順である。

（参考：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【キャリア教育や進路指導において期待する学習内容】



（資料出所：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

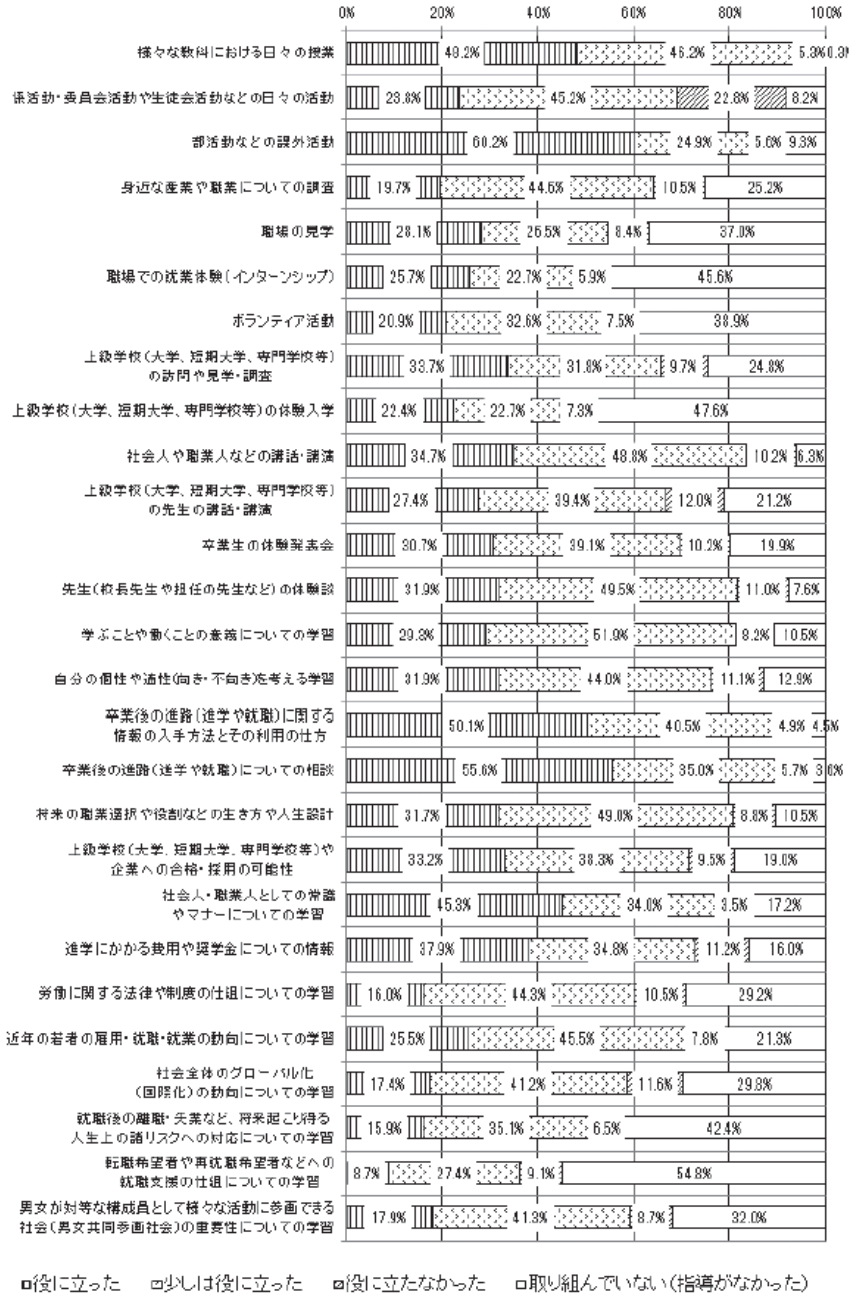
⑦　学生が高等学校時の将来の生き方や進路を考える上で役に立った学習や指導

・「役に立った」との回答割合が最も高い項目は、「部活動などの課外活動」の 60.2％である。次いで「卒業後の進路（進学や就職）についての相談」が 55.6％、「卒業後の進路（進学や就職）に関する情報の入手方法とその利用の仕方」が 50.1％である。

・「役に立たなかった」との回答割合が最も高いのは、「係活動・委員会活動や生徒会活動などの日々の活動」が 22.8％である。次いで「上級学校（大学・短大・専門学校等）の先生の講話・講演」が 12.0％、「社会全体のグローバル化（国際化）の動向についての学習」が 11.6％である。

（参考：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【将来の生き方や進路を考える上で役に立った学習や指導】



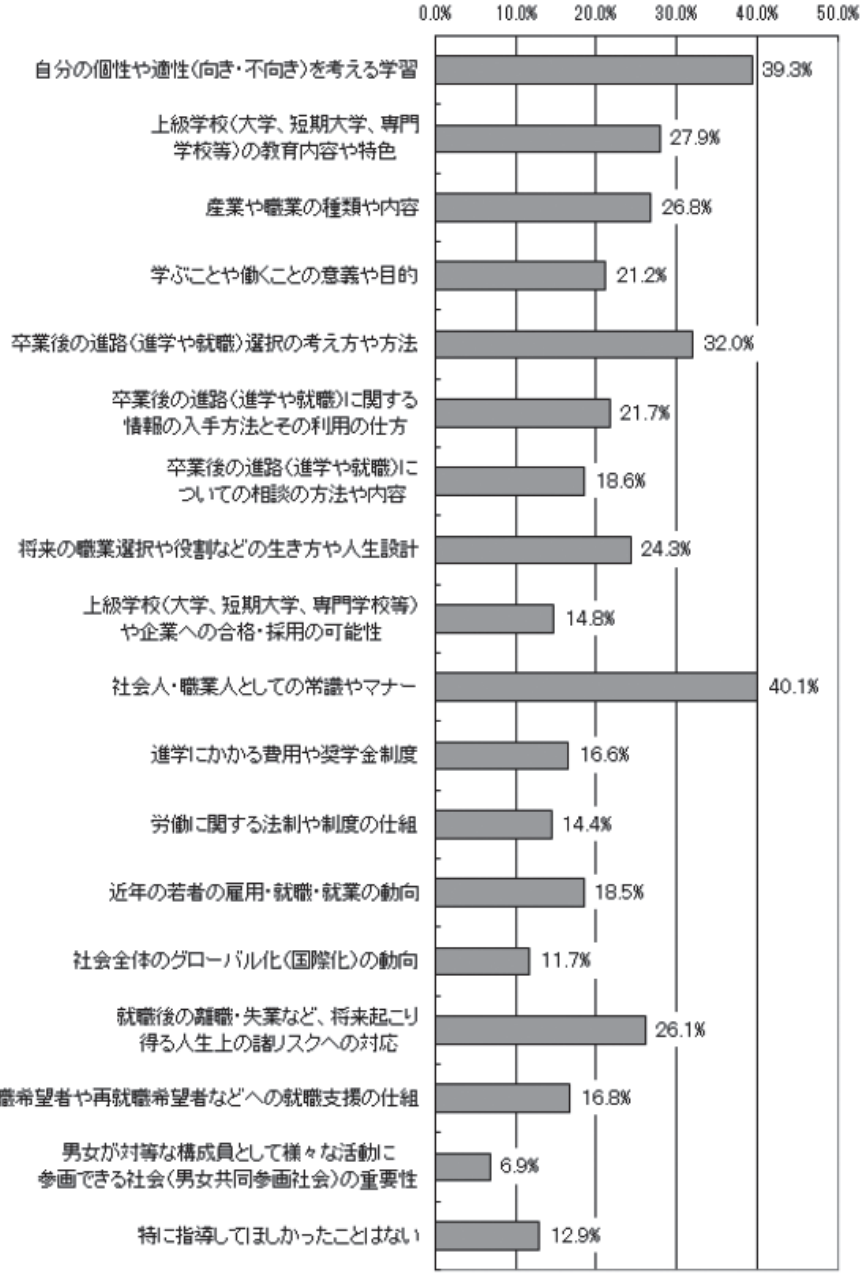
（資料出所：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

⑧　高校生の時に、将来の生き方や進路を考えるために指導してほしかったこと

・「社会人・職業人としての常識やマナー」が 40.1％と回答が最も多い。次いで「自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習」が 39.3％、「卒業後の進路（進学や就職）選択の考え方や方法」が 32.0％、「上級学校（大学・短大・専門学校等）の教育内容や特色」が 27.9％、「産業や職業の種類や内容」が 26.8％、「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応」が 26.1％であ。

（参考：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【将来の生き方や進路を考えるために指導してほしかったこと】



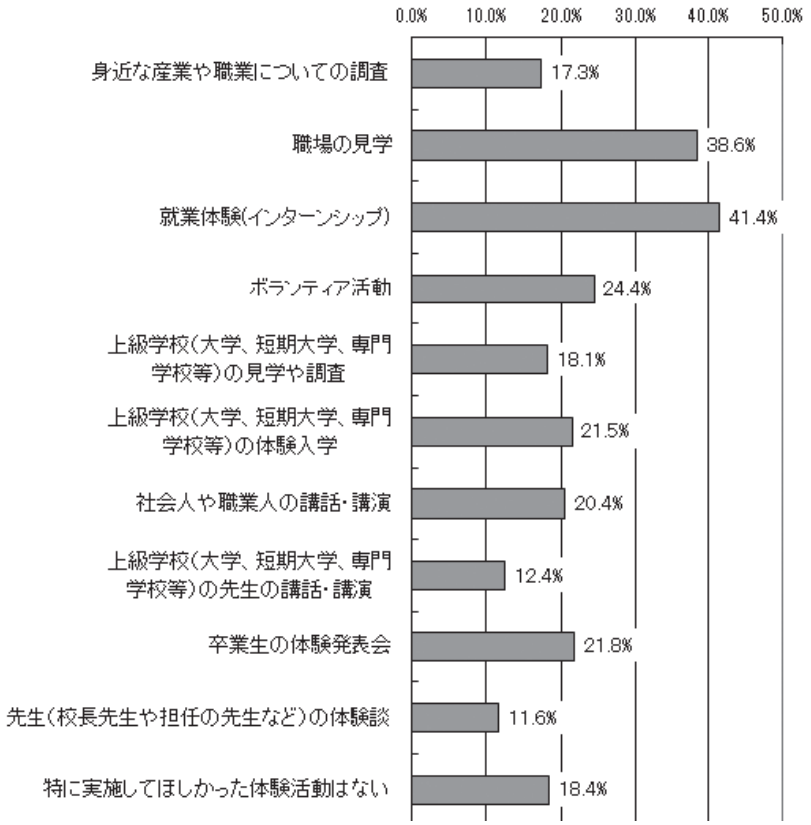
（資料出所：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

⑨　高校生の時に、将来の生き方や進路を考えるために実施してほしかった体験活動

・「就業体験（インターンシップ）」を挙げた卒業生が41.4％と最も多い。次いで「職場の見学」が38.6％、「ボランティア活動」が24.4％、「卒業生の体験発表会」が21.8％、「上級学校（大学・短大・専門学校等）の体験入学」が21.5％、「社会人や職業人の講話・講演」が20.4％の順である。

（参考：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月を基に作成）

【学生が高等学校時に将来の生き方や進路を考えるために実施してほしかった体験活動】



（資料出所：国立教育政策研究生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

2　高等学校におけるキャリア教育・職業教育の課題

①　高等学校のキャリア教育・職業教育の課題と基本的考え方

・高等学校の普通科で学ぶ生徒数が70％を超え、そのうち高等教育機関への進学率が75％を超えている。高等教育機関への進学希望者の中には、将来の生き方・働き方について考え、選択・決定することを先送りする傾向が強く、多くの生徒にとって、高等学校は高等教育機関への通過点となり、進路意識や目的意識が希薄なままにとりあえず進学している者がいる状況がうかがえる。

・一方、普通科から就職する者も依然として多く存在するが、学科別の就職状況をみると、普通科は他の学科と比べて厳しい状況に置かれているのが最近の傾向であり、普通科の生徒に対し、職業に従事するために必要な知識・技能をどのように育成するかが課題となっている。

・専門学科で学ぶ生徒の割合は、約23％（職業に関する学科については約20％）となっている。専門学科卒業者の高等教育機関への進学率は年々増加し、現在では約半数となっており、高等教育との接続を視野に入れた職業教育の充実が求められている。
・専門学科を卒業した者のうち約40％が就職しており、地域産業の中で専門学科の卒業生に対する人材の需要が存在する分野がある一方で、職業人として必要な専門的な知識・技能が高度化している分野があることや、職業が多様化しているにも関わらず、その対応が不十分であることが指摘されている。
・総合学科で学ぶ生徒は、約5％である。総合学科導入以来、設置数は年々増加し、教育と職業との接続、生徒の学校から社会及び高等教育機関への円滑な移行について一定の成果を上げている学校がみられる一方で、総合学科全体としてみた場合、導入時期に期待されていた教育の特色をいかし、その役割を果たすことができているかどうかを含め、現時点での成果と課題の検証が必要であることが指摘されている。
・高等学校教育修了までに、生涯にわたる多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度を身に付けさせ、これらの育成を通じて、価値観、とりわけ勤労観・職業観を自ら形成・確立させることを、キャリア教育の視点から見た場合の目標として設定し、キャリア教育の取組を一層充実することが重要である。
・一方、職業の多様化等に伴い、生徒のキャリア形成に関する環境や意識等の多様化も進んでおり、一人一人の状況に応じた対応にも配慮することが必要である。
・専門教育や職業・実際生活に必要な能力の育成が始まる高等学校教育においては、キャリア教育の視点だけでなく、専門的な知識、技能、能力や態度を育成し、職業へ円滑に移行する準備及び自己の将来の可能性を広げていくことができる職業教育の充実を図ることが重要である。

（参考：中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
（答申）2011年1月を基に作成）

３　高等学校におけるキャリア教育の方向性と推進方策

①　学科の特質に応じて育成すべき「基礎的・汎用的能力」

・高等学校においては、社会的・職業的自立に必要な「基礎的・汎用的能力」を育成するために、各学科の特色に応じた取組が必要となる。各学科において「基礎的・汎用的能力」を育むためには、次のような視点が考えられる。

（出典：文部科学省『高等学校キャリア教育の手引』2011年11月）

【すべての学科に共通して育成すべき力の例】

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
他者の個性を理解する力，他者に働きかける力，コミュニケーション・スキル，チームワーク，リーダーシップなど	自己の役割の理解，前向きに考える力，自己の動機付けや忍耐力，ストレスマネジメント，主体的な行動力など	情報の理解・選択・処理，本質の理解，原因の追求，課題発見，計画立案，実行力，評価・改善など	学ぶこと・働くことの意義や役割の理解，多様性の理解，将来設計，選択・行動と改善など

（資料出所：文部科学省『高等学校キャリア教育の手引』2011年11月）

【学科の特質に応じた育成の視点の一例】

学科	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
普通科	ホームルームでの話合い活動などを通じて，相互理解を図るとともに，協力して物事に取り組む意識・態度を養う。	社会人講話や就業体験などの啓発的な体験を通じて，自己の適性等を知り，主体的に行動し，自ら進んで学ぼうとする力を育成する。	具体的な課題を設定して行うディベートなどの学習を通じて，課題の本質を理解し，その課題を解決することができる力を育成する。	「大学の向こうにある社会」を認識し，将来の職業を意識して，計画的・主体的に学ぶ意欲や態度を育成する。
専門学科	実習などの体験的な学習を通して，多様な他者の個性を理解するとともに，協力・協働していく力を育成する。	専門的な学習と産業や職業との関連を知ることを通じて，自らの役割を理解し，主体的に行動していく力を育成する。	「課題研究」や「総合的な学習の時間」などの学習を通じて，様々な課題を発見・分析し，適切な計画を立て，その課題を解決することができる力を育成する。	将来の社会生活・職業生活に必要となる力を理解するとともに，卒業後も継続して職業資格の取得などに取り組む態度を育成する。
総合学科	「産業社会と人間」での学習を通じて，多様な他者との関わりの中で，円滑な人間関係などを形成する。	職業人インタビューや就業体験など啓発的な体験活動を通じて，職業の実際や自分の適性等を知り，自己の興味・関心の所在や適性等を知る。	「総合的な学習の時間」などにおいて，課題解決のための道筋を立て，多様な他者の協力を得て課題解決を図る力を育成する。	３年間の履修計画を作成し，自分の興味・関心や将来と結び付いた学習計画を立案する。様々な産業の種類や内容，課題などについて理解し，興味・関心をもつ。

（資料出所：文部科学省『高等学校キャリア教育の手引』2011年11月）

② 高等学校普通科におけるキャリア教育の課題と推進方針

・キャリア教育を実施していない高等学校が依然として存在するとともに、単に職業教育を行えばキャリア教育を実施したことになると考えているケースが見受けられる。また、高等学校のキャリア教育として、何を目指しているのかが必ずしも明確になっていないために、その重要性が十分認識されておらず、適切なキャリア教育が行われていないことがある。

・普通科の生徒に多い進学希望者の中には、将来の生き方・働き方について考え、選択・決定することを先送りする傾向が強いことが伺える。一方で、学科別の就職状況をみると、普通科は他の学科と比べて厳しい状況に置かれているのが最近の傾向であることから、普通科におけるキャリア教育の充実を優先的に検討していく必要がある。

・また、学校の授業を十分に理解することができていない生徒も存在するとともに、様々な課題を抱え職業に対する知識や準備ができないまま社会に出る生徒もいることから、基礎学力や職業に必要な能力の育成とともに、学校への定着（中退の防止）を図るという観点から、キャリア教育の取組みの充実により、学習意欲の向上につなげていくことが重要である。

・高等学校の段階においては、自らの将来のキャリア形成を自ら考えさせ、選択させることが重要であることから、学科や卒業後の進路を問わず、現実的に社会・職業の理解を深めることや、自分が将来どのように社会に参画していくかを考える教育活動等を指導計画に位置づけて実施することが重要である。

・社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育成することに取り組むべきであ

る。特に、高等学校の段階は、社会人・職業人としての自立が迫られる時期であることから、生涯にわたる多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度の育成がとりわけ重要な意味をもつ。この能力や態度を各学校でどの程度育成するか、地域や生徒の実態に即しつつ、学校ごとに到達目標を明確に設定することが求められる。

・キャリアを積み上げていく上で必要な知識等を、教科・科目等を通じて理解させるべきである。特に高等学校の段階は、学校と家庭以外での生活や社会の中での活動が増える時期にもかかわらず、現在の高校生は社会の仕組みや様々な状況に対処する方法を十分には身に付けていないと指摘されており、知識として学ぶことと体験を通して学ぶこととの両面から、現実社会の厳しさも含めて、一人一人の将来に実感のあるものとして伝えることが特に重要である。
・卒業生・地域の職業人等とのインタビューや対話、就業体験活動等の体験的な学習の機会を、計画的・体系的なキャリア教育の一環として十分に提供し、これらの啓発的な経験を通して、進路を研究し、自己の適性の理解、将来設計の具体化を図らせるべきである。
・これらの学習を通して、生徒が自らの価値観、とりわけ勤労観・職業観を形成・確立できるようにするべきである。
・普通科においては、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、職業生活を送るための基礎的な知識・技能に関する学習機会の充実に努めることが必要である。
・普通科における職業科目（家庭、商業等）の履修は、より具体的な職業との関連を意識した学習を通じたキャリア教育の実践にもなることを十分考慮し、各学校において、職業科目の教育課程上の位置付けや履修指導の方法等の見直しを図りつつ、その機会を確保していくことが必要である。
・進路指導は、本来、生徒の個人資料・進路・情報・啓発的経験及び相談を通じて、どのような人間になり、どう生きていくことが望ましいかという長期的展望に立った人間形成を目指す教育活動である。進路指導のねらいは、キャリア教育の目指すところとほぼ同じである。しかし、実際に学校で行われている進路指導においては、進路指導担当教員と各教科担当の教員との連携が不十分であること、一人一人の発達を組織的体系的に支援するといった意識や姿勢、指導計画における各活動の関連性や体系性等が希薄であり、子どもたちの意識の変容や能力や態度の育成に十分に結びついていないという指摘がある。各学校は、自校におけるこれまでの進路指導の実践をキャリア教育の視点から捉え直し、その在り方を見直すことが必要である。

（参考：中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
（答申）2011年1月を基に作成）

③　専門学科における職業教育の推進方策

・現在の専門学科は、職業の多様化、職業人として求められる知識・技能の高度化への対応が求められていることから、職業人としての自己学習力や社会の中での自らのキャリア形成を計画・実行できる力等を育成していくことが必要である。
・専門学科においては、卒業後の進路を問わず、将来にわたって職業人として必要とされる専門的な知識・技能の高度化に対応できる力の育成が必要である。また、産業・社会が高度化・複雑化する中で、新しい分野・職業等が日々生まれており、このような職業の多様化に対応できる人材の育成も求められる。
・それぞれの職業に就くに当たって、必要な基礎的・汎用的能力や専門的な知識・技能を備え、あるいは、今後このような能力が伸びていく可能性を有するとともに、自立して行動できる態

度・価値観を持ち、それらの能力等を生涯にわたって発揮できる力を育成することが重要である。

（参考：中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）2011年1月を基に作成）

④　総合学科における今後の在り方

・総合学科の本来の目的である、生徒に目的意識や将来の進路への自覚を持たせるための学習を進めることが難しい状況にあるなど、その特色をいかすための教育活動をさらに充実するための方策が必要である。
・各学校・教育委員会においては、高等学校の教職員の総合学科に対する理解を促進するとともに、生徒に目的意識や将来の進路への自覚を持たせるための教育活動の充実や、そのための教育環境の充実に努めることが必要である。
・総合学科の本来の目的である、生徒が主体的に選択して学習するという教育を実施し、将来の進路への自覚を促すためには、普通教科・専門教科ともに幅広く開設し、多様な分野の学習機会を保障するための条件整備が不可欠である。

（参考：中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）2011年1月を基に作成）

大学進学希望者に対するキャリア教育の一層の充実を

「基礎的・汎用的能力」を構成する４つの能力の育成については、「これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるかは、学校や地域の特色、専攻分野の特性や子ども・若者の発達の段階によって異なる」と言われています。とりわけ高校では、学科やコース等の特色を活かし、かつ、生徒の実態に即した実践が期待されます。

けれども、大学等への進学希望者に目を向けると、将来の生き方・働き方について考え、選択・決定することを先送りする傾向が一部に見られ、そういった生徒の中には、進路意識や目的意識が希薄なままとりあえず進学している者も少なくないようです。また、いわゆる進学校と呼ばれる普通科では、一部の先生方の間にも、大学合格のみを目指す指導を偏重する風潮があるように見受けられます。

せっかく大学に進学したにもかかわらず、合格という最大の目的を達成した後の虚脱感に長期間悩まされ、大学での学びに対する積極的な姿勢をなかなか持てずにいる学生は、けっして例外的存在ではありません。そういう学生に出会うたび、とりわけ普通科におけるキャリア教育の一層の充実は喫緊の課題であると強く感じます。

この十数年の間、普通科に限らず、大学進学を希望する生徒の割合は高まり続けてきました。大学を卒業した、という事実がその後の安定した暮らしをある程度保証した時代が、すでに過去のものとなった今日、大学生活をどのように過ごすかはもちろんのこと、大学の向こう側にある社会を現実に即して展望し、そこでどのように生きていくかを考えさせ、そのために必要となる能力を高めるキャリア教育の充実は高校教育全体の課題であると言えるでしょう。

同時に、知識基盤社会と言われる今日にあって、大学で身に付けた知識や技能をどのように社会に還元し、より良い社会の形成をどのように担っていくかという視点からの指導の充実も不可欠であることは、言うまでもありません。

筑波大学人間系　教授　藤田　晃之

Part2

高等学校の部

第3章

高等学校での
キャリア教育の授業開発

1　各教科の目標と教科活動におけるキャリア教育の取組み

(1)　国語

①　教科の目標

・国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

②　キャリア教育の取組み

・国語科では、実生活で生きて働き、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けることを重視している。とりわけ高校では、従前、社会人として生きるために必要とされる国語の能力の基礎を身に付けることを大切にしてきた。

・国語科の指導は、生徒がキャリアを形成していくために必要な能力や態度を育成するための基盤を身に付けさせることでもある。

（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に関連する「国語総合」の指導事項】

領域／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
A 話すこと・聞くこと	・　目的や場に応じて，効果的に話したり的確に聞き取ったりすること。 ・　課題を解決したり考えを深めたりするために，相手の立場や考えを尊重し，表現の仕方や進行の仕方などを工夫して話し合うこと。	・　話したり聞いたり話し合ったりしたことの内容や表現の仕方について自己評価や相互評価を行い，自分の話し方や言葉遣いに役立てるとともに，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにすること。	・　話題について様々な角度から検討して自分の考えをもち，根拠を明確にするなど論理の構成や展開を工夫して意見を述べること。	・　話題について様々な角度から検討して自分の考えをもち，根拠を明確にするなど論理の構成や展開を工夫して意見を述べること。（再掲）
B 書くこと	・　課題を解決したり考えを深めたりするために，相手の立場や考えを尊重し，表現の仕方や進行の仕方などを工夫して話し合うこと。	・　優れた表現に接してその条件を考えたり，書いた文章について自己評価や相互評価を行ったりして，自分の表現に役立てるとともに，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにすること。	・　対象を的確に説明したり描写したりするなど，適切な表現の仕方を考えて書くこと。	・　論理の構成や展開を工夫し，論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。
C 読むこと	・　文章に描かれた人物，情景，心情などを表現に即して読み味わうこと。 ・　文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方について評価したり，書き手の意図を捉えたりすること。	・　幅広く本や文章を読み，情報を得て用いたり，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしたりすること。	・　文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。 ・　文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり，必要に応じて要約や詳述をしたりすること。	・　幅広く本や文章を読み，情報を得て用いたり，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしたりすること。（再掲）

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

(2)　地理歴史

①　教科の目標

・我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う。

（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

② キャリア教育の取組み

・地理や歴史の知識・概念・技能を習得することで、社会的事象を捉えることができる。自らが国家・社会の形成者であるという視点に立って思考・判断することは、自己のキャリアの形成につながる。

・社会的事象を多面的・多角的に捉える力、直面する課題を探究するための資料の収集と分析・考察、その過程や結果を表現する力も、キャリア育成を支える要素となる。

・主体的に社会に参画する資質や能力を育成することが各教科において重視される。

（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【高等学校における地理歴史科の指導内容とキャリア教育－「基礎的・汎用的能力」を視点として】

分野／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
地理	・ 課題追究的な学習の中で自分の考察した意見を相手に的確に伝える。 ・ 他者の多様な意見を受け入れて考えを深める。また，疑問に思うことを質問する。 ・ 博物館・資料館などの調査・見学活動を通し，地域の人々と交流する。	・ 地理的な見方や考え方を踏まえ，諸事象の空間的な規則性や傾向性を捉える。 ・ 諸地域を比較し関連付け，一般的共通性と地域的特殊性の視点から捉える。	・ 収集した地理情報を目的に合わせて選択・処理し，地域性を読み取り，比較し，関連付け，変容を捉える。 ・ 現代世界が抱える地球環境問題などの諸課題を，地域性を踏まえて考察する。	・ 地理的事象の背景を地域の枠組みで捉え，環境条件や他地域との結び付き，人間の営みに着目し自己の役割を追究する。 ・ 地理的事象の変容を捉え，地域の課題や将来像について考える。
歴史		・ 諸地域世界の形成，交流と再編，結合と変容，及び一体化の過程を政治・経済・社会・文化など幅広い見方で捉える。 ・ 日本列島内の地域的差異を，地域の特色や相互の関係性などの理解を通し，地域社会と国家の歴史的な関わりから捉える。	・ 科学技術の利用の在り方や宗教・民族を巡る紛争などの諸課題を，歴史的背景を踏まえて考察する。 ・ 年表・地図の他にも文献資料や図像資料，映像資料などを活用し，様々な視点から考察する。	・ 歴史的事象の背景を考察し，世界との関連の中で日本及びその属する地域の将来像を考え，自己の役割を追究する。 ・ 歴史上の人物の生き方について，時代背景などを踏まえて考察し，自己の生き方や役割，将来設計を考える。

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

⑶ 公民

① 教科の目標

・広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。

（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

② キャリア教育の取組み

・社会的・職業的に自立するためには、現代の社会について理解し、それに基づいて自らの生き方や社会の在り方について考察することが欠かせないことから、公民科の学習は、高校のキャリア教育において、重要な役割を担っている。

・自らの労働や生活につながるものとして経済社会について理解を深めさせることや主権者としての政治参加の重要性や裁判員としての司法参加の意義を考えさせ、社会の有意な形成者としての役割と責任を自覚させることは、この社会において「生きる力」につながる。

・具体的な雇用や労働問題、社会保障などの知識は、一人一人のキャリアを支える重要な基礎と

なる。卒業後の社会では、非正規雇用の増加など、労働者の職業生活を取り巻く環境が大きく変化していることから、労働保護立法や社会保障制度などを、一人一人の将来の生活に直接関わる生きたものとして伝えることが重要である。

・生徒自身が望む働き方やワーク・ライフ・バランスを考えたり、社会全体にとってどのような雇用や社会保障の在り方が望ましいのかについて話し合ったりすることで、生徒のキャリア発達を促すことができる。

（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する公民科の指導内容の例】

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
・　生命倫理や科学技術の利用など価値判断の分かれる問題について，ディベートさせる。 ・　社会の課題について，グループで協力して，調査し発表させる。 ・　裁判員が参加する模擬裁判のロールプレイを，役割分担して進行させる。 ・　自分自身の悩みや体験を振り返り，先哲の思想を学ぶことを通して，他者と共に生きる倫理について，自覚を深めさせる。 ・　経済活動や政治参加，ボランティア活動などを通して，社会形成に関わることができることを理解させる。	・　若者を取り巻く雇用情勢とその背景について学ぶことを通して，自らが置かれている社会的な状況について，理解を深めさせる。 ・　労働基準法をはじめとする労働法や相談機関について学び，労働現場で自らを守ることができる力を身に付けさせる。 ・　消費者問題や金融について学び，トラブルを避けて，自らの家計を維持するための基礎知識を身に付けさせる。	・　統計などの資料を読み取り，分析する力を身に付けさせる。 ・　社会的事象に関する情報の検索の仕方を学び，複数の情報源からの情報を比較検討するなど，メディアリテラシーの能力を身に付けさせる。 ・　社会調査の方法を学び，調査結果をグラフやインタビュー記録などの形で整理して，自ら情報を生産し表現する力を身に付けさせる。 ・　調べた内容を，自らの考察を含めたレポートとしてまとめ，論理的に表現させる。	・　グローバル化が進む世界経済と日本経済の動向について理解させ，これからの産業の在り方，その中での様々な仕事の可能性について考えさせる。 ・　社会保障制度や就労支援の取組などについて理解させ，自らのキャリアが思うように進まない場合もそれらの制度や支援を活用できるように準備させる。 ・　労働や地域のボランティア活動への参加など，様々な社会への関わり方があることを理解させ，自らの生き方を考えさせる。 ・　中小企業と大企業から成る日本経済の二重構造について理解させ，産業の在り方について考えさせるとともに，中小企業の可能性にも目を向けさせる。

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

(4)　数学

①　教科の目標

・数学における基本的な概念や原理・法則の理解を深め、事象を数学的に考察し処理する能力を高め、数学的活動を通して創造性の基礎を培うとともに、数学的な見方や考え方のよさを認識し、それらを積極的に活用する態度を育てる。

（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

②　キャリア教育の取組み

・自ら課題を見出し、解決するための構想を立て、考察・処理し、その過程を振り返って得られた結果の意義を考えたり、それを発展させたりすることは、自己理解・自己管理能力の育成につながる。

・他者に分かりやすく論理的に伝え、議論することは、言語活動によるコミュニケーション能力や自己表現力の育成につながり、ひいては人間関係形成力・社会形成能力につながっていく。

（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に関連する数学科の指導内容の例】

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
新しい単元「データの分析」では他者の分析を聞くことにより多角的なものの見方や考え方を身に付けることができます。特に，コンピュータを使って多くのデータを分析する際に，他者と協力し合って効率よくデータを入力したり処理したりすること，お互いに意見を出し合ったりすることは，コミュニケーション・スキルの育成につながります。	数学的活動の多くは，問題解決の形で行われます。そこでは粘り強く思考する態度が必要とされ，成就感や達成感などを基にして自信を高め自尊感情を育む機会も生まれます。 自己肯定感の低さが指摘される中，「やればできる」と考えて行動する力は，このように粘り強く考え抜いて問題を解決する経験を通して得られると考えます。	様々な課題について，数量などその数学的側面に着目して課題を数学的に表現し，処理して得られた結果を元の課題に戻してその意味を考えます。このようにして，それぞれの課題に対して数学的視点に立って積極的に対応する能力を育てます。	数学では，身近な事象を体系付けるために，仮定や仮説もしくは公理・定義を準備した上で，数学的考察や演繹的論証を展開し一つの定理を得ます。また，一つの定理から新たな定理を生むことも学習過程において知ることができます。この過程は一歩ずつ階段を上っていくようなもので，このような一連の流れを学習することにより育成される視点は，自らのキャリアプランニングを形成していく際の重要な能力だと考えます。

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

⑸ 理科

① 教科の目標

・自然に対する関心や探究心を高め、観察、実験などを行い、科学的に探究する能力と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な自然観を育成する。
（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

② キャリア教育の取組み

・実験や観察などを通して、探究する能力や態度を身に付けることが求められている。新しい知識、・情報・技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す現代社会では、新しい知識や情報の真偽を科学的に判断することや、筋道を立てて理解するのが必要な事態がしばしば起こる。生涯にわたって、主体的・創造的に生きていく上で、探究する能力や態度を身に付けることは、必要不可欠である。
（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する理科の指導内容の例】

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
・ 他者と協力・協働して，グループで観察・実験を行う。 ・ 実験レポート・観察記録の作成や発表により，互いの考えを理解し合う。	・ 一人一人の人間が，エネルギーや環境などについて考えて，主体的に行動することで，社会に貢献できることを理解し，知恵をもって行動する。 ・ 自己の役割を理解し，主体的に観察・実験に取り組む。	・ 課題に対して，探究的に活動し，科学的に分析し，真理を見いだそうとする。 ・ 情報を収集・整理して課題解決に活用する。 ・ グループでの協働作業がスムーズに進むように，作業の段取りを考え，適切に行動する。	・ 理科で学んだことや科学的な考え方が様々な職業や社会生活と関連していることを理解し，自らの生き方に生かす。 ・ 科学技術の発展と人間生活との関わりについて認識を深め，科学的に考えようとする。

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

⑹ 保健体育

① 教科の目標

・心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための

実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる
（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

② キャリア教育の取組み

・保健体育は、現在及び将来の生活を健康で活力に満ちた明るく豊かなものにすることを究極の目標としており、キャリア教育と密接に関連する指導内容がある。
・保健体育を通して育成する健康の保持増進のための実践力や体力は、一人一人のキャリア形成の基盤としても極めて重要である。
（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する保健体育科の指導内容の例】

科目／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
科目体育	・ 人にはそれぞれ違いがあることを認めた上で，仲間の演技のよさを指摘したり，仲間の技能の程度にかかわらず，課題を共有して互いに助け合ったり教えあったりする。 ・ 話合いなどでグループの学習課題等についての意思決定をする際に，相手の感情に配慮して発言したり，仲間の意見に同意したりしてグループの意思決定に参画する。	・ 体調や環境の変化に注意を払いながら運動を行う。 ・ けがを未然に防ぐために必要に応じて，危険の予測をしながら回避行動をとる。 ・ 自己や仲間の健康を維持したり安全を保持したりする。	・ これまでの学習を踏まえて，目標に応じた自己やチームの課題を設定する。 ・ 課題解決の過程を踏まえて，自己やチームの課題を見直す。 ・ 仲間の技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘する。 ・ 健康・安全を確保・維持するために，自己や仲間の体調に応じた活動の仕方や自己や仲間の危険を回避するための活動の仕方を選ぶ。	・ 様々な運動において実生活，実社会の中で継続しやすい運動例を選ぶ。 ・ 運動を生涯にわたって楽しむための自己に適した関わり方を見付ける。
科目保健	・ 思春期における自分の行動への責任感や異性を尊重する態度，及び性に関する情報等への適切な対処などの必要性について考える。 ・ 結婚生活を健康に過ごすために，良好な人間関係や家族や周りの人からの支援などの必要性について考える。	・ 健康を保持増進するためには，一人一人が健康に関して深い認識をもち，自らの健康を適切に管理すること及び環境を改善していくことが重要であることを理解する。	・ 生涯の各段階においての健康課題を見付け，自らこれに適切に対応したり，保健・医療制度等を活用したりするなどの解決方法を考える。	・ 社会生活における健康の保持増進には，環境や食品，労働が深く関わっていること，それらと健康に関わる活動や対策について理解を深める。

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

(7) 芸術

① 教科の目標

・芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、豊かな情操を養う。
（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

② キャリア教育の取組み

・作品を形作っている諸要素を知覚することや、そのよさを感じ取り、思考・判断し表現する力の育成を重視することで、各種能力の向上に結び付けることが重要である。
・価値観の多様化が進む現代社会においては、様々な他者を認めつつ、他者と協働していく力が必要になる。その中で、芸術の授業において解釈したことや自分なりに判断したことを基に批評し合うなど、諸活動を通して異なる価値観を共有することが大切である。
（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する芸術科の指導内容の例】

分野／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
音楽	・ 音楽を形づくっている要素を知覚し，それらの働きを感受しながら表現を工夫して歌ったり，演奏したり，つくったりする。 ・ 楽曲の文化的，歴史的背景や表現の特徴を理解して鑑賞し，根拠をもって批評し合う。	・ 曲想を楽曲の背景と関わらせて感じ取り，イメージをもって歌ったり，演奏したりする。 ・ 楽曲の文化的，歴史的背景や表現の特徴を理解して鑑賞し，根拠をもって批評する。	・ 曲種に応じた発声の特徴や，楽器の音色や奏法の特徴を生かし，表現を工夫して歌ったり，演奏したりする。 ・ 音階を選んで旋律をつくったり，音素材の特徴を生かし構成を工夫してつくったりする。	・ 我が国や郷土の伝統音楽，アジア地域の諸民族の音楽を含む諸外国の様々な音楽の特徴を理解するとともに，多様性を感じ取り，鑑賞する。
美術	・ 感じ取ったことや考えたことなどについて，根拠を明らかにして自分の考えを述べたり，生徒同士で批評したりする。	・ 意図に応じて材料や用具の特性を生かすなど，表現を工夫する。 ・ 表現方法を工夫し，主題を追求したり，目的や計画を基に表現したりする。	・ 表現形式の特性を生かし，形，形体，色彩，構成などを工夫して創造的な表現の構想を練る。	・ 日本の美術の歴史や表現の特質，日本及び諸外国の美術文化について理解を深めるとともに，多様性を感じ取り，鑑賞する。

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

(8) 外国語

① 教科の目標

・外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

② キャリア教育の取組み

・教育活動の中で、生徒たちが基礎的な知識・技能を習得し、これらを活用して、自ら課題を解決するために思考し、判断し、表現することは、すべて言語を通して行われる。その意味において、言語に関する技能そのものの習得を目的とする外国語科は、生徒たちのキャリア発達に不可欠な能力や態度を育成する重要な役割を担っている教科である。

・特に、人間関係・社会形成能力の重要な要素であるコミュニケーション能力の育成において、外国語科における学習が果たす役割は大きい。

・外国語の学習は、言語とその文化的な背景を学ぶことにより、自分を取り巻く社会や世界に目を向け、他者に対して積極的に関心を持ち交流していく意欲や能力を育むとともに、自分が住む社会や世界で自分自身をより良く生かしていくことができるよう、必要な情報や考え等を的確に理解したり適切に伝えたりする能力を育成するものである。これらのことは、キャリア教育が目指す社会的・職業的自立の基盤となる能力・態度であることはいうまでもない。

（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する外国語科の指導内容の例】

能力学年	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
入学 第一学年	「読むこと」 ・ 読んで理解した内容を聞き手に伝わるように，その反応を確かめながら音読する。	「話すこと」 ・ 相手に伝わるように表現しようとすることが，自分の考えを整理したり深めたりすることに役立つということに気付く。	「聞くこと」 ・ 事物に関する紹介や対話などを聞いて，情報と考え，事実と意見などを区別し整理しながら概要や要点を捉える。	「書くこと」 ・ 聞いたり読んだりしたことなどの概要や要点を書く際，平易な表現に置き換えたり，情報の順序を変えたりするなどして，読み手にわかりやすく表現する。
第二学年 第三学年	「話すこと」 ・ 情報や考えなどについて，ペアやグループで話し合うなどして結論を導いたり，論理的な話合いを通じて，合意できることやできないことについて共通の認識を得る。	「読むこと」 ・ 何のために読むのかをあらかじめ明らかにし，目的に応じた読み方を選択する。	「書くこと」 ・ まとまりのある文章を書く際に，論理の一貫性，段落のつながりなどに注意するとともに，誰を対象にして書くのか，何のために書くのかなどの書く目的を明確に設定する。	「聞くこと」 ・ キーワードやトピック・センテンスを的確に把握して内容の展開を理解するとともに，その後の展開を予想して聞く。
卒業	上記の各活動をさらに発展させ，社会生活において活用できるようにする。			

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

(9) 家庭

① 教科の目標

・人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義，家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。
（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

② キャリア教育の取組み

・家庭科は、人の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的に捉え、生涯発達の視点に立ち自立した社会の一員として、生きる力を身に付けていくことを重視していることから、家庭科でねらう力とキャリア教育で付けたい力とは密接に関連している。
（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する家庭科の指導内容の例】

分野／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
共通教科「家庭」『家庭基礎』『家庭総合』『生活デザイン』の共通分野	・ 生涯発達の視点で人の一生と青年期の自立，家族・家庭について考える。 ・ 子どもの発達，親の役割と保育，地域社会の果たす役割を理解する。 ・ 高齢期の生活を理解し，高齢者の自立生活を支える家族や社会の役割を考える。 ・ 共に支え合って生きていることを認識し，家庭や地域及び社会の一員として主体的に行動することの意義について考える。	・ 消費生活の現状と消費者問題や消費者の権利と責任を理解し，生涯を見通した経済計画について考える。 ・ ライフステージごとの衣食住の生活を科学的に理解し，持続可能な社会を目指して安全と環境に配慮して，主体的に衣食住を営むことができる。	・ ホームプロジェクトと学校家庭クラブにおいて，生活上の課題を設定し，解決方法を考え，実践することを通して，生活を科学的に探究する方法や問題解決の能力を身に付ける。	・ 持続可能な社会を目指したライフスタイルを確立して主体的に行動できるようにする。 ・ 生活設計を立て，生涯を見通した主体的な生活ができるようにする。

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

⑽　情報

①　教科の目標

・情報及び情報技術を活用するための知識と技能の習得を通して、情報に関する科学的な見方や考え方を養うとともに、社会の中で情報及び情報技術が果たしている役割や影響を理解させ、情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育てる。
（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

②　キャリア教育の取組み

・高度に進展した情報社会においては、人間が生きていくための必須条件として、衣食住に情報が加わっているといっても過言ではない。
・多様化する情報源、短時間に大量に創造され、流通している情報、そして誰もが情報の発信者になれる時代を適切に生き抜くために必要な情報活用能力は、社会人として、そして職業人として欠かすことができない。
・技術革新に伴う新たな価値観、マナー、モラルを身に付ける情報モラルの教育も、人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力などを育成するキャリア教育の一環と位置付けられる。
（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する情報の指導内容の例】

科目／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
社会と情報	・　コミュニケーション手段の発達をその変遷と関連付けて理解させるとともに，通信サービスの特徴をコミュニケーションの形態との関わりで理解させる。 ・　情報通信ネットワークの特性を踏まえ，効果的なコミュニケーションの方法を習得させるとともに，情報の受信及び発信時に配慮すべき事項を理解させる。	・　多くの情報が公開され流通している現状を認識させるとともに，情報を保護することの必要性とそのための法規及び個人の責任を理解させる。	・　情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して問題を解決する方法を習得させる。	・　情報を分かりやすく表現し効率的に伝達するために，情報機器や素材を適切に選択し利用する方法を習得させる。 ・　情報化が社会に及ぼす影響を理解させるとともに，望ましい情報社会の在り方と情報技術を適切に活用することの必要性を理解させる。
情報の科学	・　社会の情報化が人間に果たす役割と及ぼす影響について理解させ，情報社会を構築する上での人間の役割を考えさせる	・　情報社会の安全とそれを支える情報技術の活用を理解させ，情報社会の安全性を高めるために個人が果たす役割と責任を考えさせる。	・　問題の発見，明確化，分析及び解決の方法を習得させ，問題解決の目的や状況に応じてこれらの方法を適切に選択することの重要性を考えさせる。 ・　問題解決における情報通信ネットワークの活用方法を習得させ，情報を共有することの有用性を理解させる。 ・　問題解決の過程と結果について評価し，改善することの意義や重要性を理解させる。	・　情報システムとサービスについて，情報の流れや処理の仕組みと関連付けながら理解させ，それらの利用の在り方や社会生活に果たす役割と及ぼす影響を考えさせる。

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

⑾　産業社会と人間

①　科目の目標・内容等を決定する際の指針

・産業社会における自己の在り方生き方について考えさせ，社会に積極的に寄与し，生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を養うとともに，生徒の主体的な各教科・科目の選択に資するよ

う，就業体験等の体験的な学習や調査・研究などを通して，次のような事項について指導することに配慮するものとする。

ア　社会生活や職業生活に必要な基本的な能力や態度及び望ましい勤労観，職業観の育成

イ　我が国の産業の発展とそれがもたらした社会の変化についての考察

ウ　自己の将来の生き方や進路についての考察及び各教科・科目の履修計画の作成

（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

② キャリア教育の取組み

・「産業社会と人間」は、すべての学校において、学校設定教科に関する科目として設けることができ、学校の実態等に応じて目標、内容、単位数などをさだめることができる（総合学科では、全ての生徒が原則として入学初年次に履修する）。

・「産業社会と人間」の学習内容は、知識として学ぶことと体験を通して学ぶこと、学んだことと自分との関わりを深く考察することなどから構成されているため、各教科に属する科目、総合的な学習の時間及び特別活動などとの関連を深めて学習することができる。

・「産業社会と人間」の指導は､ホームルーム担任を中心とした複数の教員によるティームティーチングで行われることが多く、学習内容によっては、専門的な知識を有する外部人材等を講師として活用している場面が見られる。このため、学習を通して多様な他者と関わる中で、自分の個性や興味・関心、職業理解や職業適性、人間としての在り方生き方、将来の進路などについて多面的に考察し、自分と社会とのつながりを認識することができる。

・「産業社会と人間」は、生徒のキャリア発達を促進する実践的な活動を多く包含していることから、職業的 (進路) 発達の段階が、「現実的探究・試行と社会的移行の準備の時期」とされる高等学校において、たいへん意義のある学習であり、正に、「授業としてのキャリア教育」を展開することができる。

（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する「産業社会と人間」の指導内容の例】

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
・ 自分と他者との違いを認識し，互いに分かり合おうとする。 ・ グループ学習等において，自分の役割を知り，協力することで円滑な人間関係を築く。 ・ 調査した結果をまとめ，共同して発表資料等を作成する。 ・ ポスターセッションなどで互いの意見を交換する。	・ 心理検査（性格検査，進路適性検査など）を活用して，自分を客観的に見つめる。また，経年比較により自分の成長を認識する。 ・ 自己を肯定的に捉え将来に向けて主体的に行動する。 ・ 「職業人インタビュー」など啓発的な体験活動を通じて，職業の実際や自分の適性等を知る。	・ 職業人インタビューにおいて調査対象者とコンタクトを取り，調査の日程や内容等を調整する。 ・ 課題解決のための道筋を立て，多様な他者の協力を得て課題解決を図る。 ・ 職業調査等を通じて得た情報を，図やグラフなどにまとめる。 ・ 多くの危機の事例を参照し，話合いなどによって危機管理能力を高める。	・ ３年間の履修計画を作成し，自分の興味・関心や将来と結び付いた学習計画を立案する。 ・ 様々な産業の種類や内容，課題などについて理解し，そこでの生活の様子に目を向ける。 ・ 様々なキャリアの体験を最終的な進路決定につなげる。 ・ キャリアプラン・ライフプランを作成し，発表会の実施や相互評価の工夫により，具体性を高める。

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

⑿ 総合的な学習の時間

① 教科の目標

・横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え

方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする。
（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

② キャリア教育の取組み

・自己の在り方生き方を追究する高校の総合的な学習の時間は、高校における学習活動の中で最もキャリア教育の根幹に関わっている。
・総合的な学習の時間を通したキャリア教育の実践は、単なる職業体験や進学指導ではなく、個人としての在り方生き方や現代社会の諸課題に関わる社会の一員としての在り方生き方などについて考えることが大切である。
（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【高等学校における総合的な学習の時間の指導内容とキャリア教育
－「基礎的・汎用的能力」を視点として－】

活動／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
学習方法に関すること	・ 互いに意見を出し合い，見通しを確かめ合い，他者の意見を受け入れながら課題を探究する。	・ 複雑な問題状況を踏まえ適切な課題を設定する。	・ 目的に応じて情報を収集し整理・分析，帰納的・演繹的に考察して，論理的に表現する。	・ 仮説に基づいて計画を立案する。 ・ 学習の進め方を内省し，現在及び将来の生活に生かそうとする。
自分自身に関すること	・ 自らの行為について当事者意識と責任をもって意思決定する。	・ 自らの生活の在り方を見直し，改善に向けて日常的に実践する。 ・ 学ぶ意味や価値を考える。	・ 目標を明確にし，課題の解決に向けて計画的に着実に行動する。	・ 将来について具体的に考え，夢や希望をもつ。 ・ 自らの人生観・世界観・価値観を形成する。
他者や社会との関わりに関すること	・ 異なる意見や他者の考えを受け入れ，尊重し理解しようとする。 ・ 人間や国家，社会の在るべき姿について考える。	・ 課題の解決に向けて多様な社会活動に当事者意識をもって参画する。	・ 発表・討論の仕方やコミュニケーションの取り方を身に付ける。 ・ 互いを認め合い，協同して課題を解決する。	・ 社会や自然の中に生きる一員として，何をすべきか，どのようにすべきかを考える。

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

⒀ 特別活動

① 教科の目標

・望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。
（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月）

② キャリア教育の取組み

・特別活動は、キャリア教育の中核的な実践の場である。
・ホームルーム活動における学業と進路は、生徒が主体的に取り組むキャリア教育の実践の場として重要な役割を果たす。
・ホームルーム活動のほかの内容もキャリア教育に深く関連し、生徒会活動や学校行事もキャリア教育として重要な内容を多く包含している。
（参考：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する特別活動の指導内容の例】

活動／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
ホームルーム活動	・　ホームルーム内の組織づくりと自主的な活動 ・　男女相互の理解と協力 ・　コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立	・　青年期の悩みや課題とその解決 ・　社会生活における役割の自覚と自己責任 ・　心身の健康と健全な生活態度や規律ある習慣の確立	・　ホームルームや学校における生活上の諸問題の解決 ・　学校における多様な集団の生活の向上 ・　進路適性の理解と進路情報の活用	・　ボランティア活動の意義の理解と参画 ・　学ぶことと働くことの意義の理解 ・　主体的な学習態度の確立と学校図書館の利用 ・　主体的な進路の選択決定と将来設計
生徒会活動	・　学校生活における規律とよき校風の確立のための活動 ・　望ましい人間関係を深めるための活動 ・　異年齢集団による交流	・　生徒の教養や情操の向上のための活動 ・　学校行事への協力	・　身近な問題の解決を図るための活動 ・　生徒の諸活動についての連絡調整	・　環境の保全や美化のための活動 ・　生徒会の計画や運営 ・　ボランティア活動などの社会参画
学校行事	・　共に助け合って生きることの喜びの体得 ・　郊外における集団活動を通して，教師と生徒及び生徒相互の人間的な触れ合いや信頼関係の大切さの経験	・　安全な行動や規律ある集団行動の体得 ・　責任感や連帯感の涵養（かん） ・　生涯にわたり，文化や芸術に親しむための豊かな情操の涵養	・　集団のきまりや社会生活上のルール，公衆道徳などの体験 ・　前年度の計画の見直しと課題解決のための立案	・　勤労の尊さや創造することの喜びの体得 ・　就業体験などの職業観の形成や進路の選択決定などに資する体験 ・　ボランティアなどの社会奉仕の精神を養う体験

（資料出所：文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」2011年11月）

2　ホームルーム活動（いわゆる「ロングホームルーム」）におけるキャリア教育の実践例

・テーマ：自分を知る（職業に関する自分の興味・関心を知り、その職業を見据えた進路決定ができるようになる）
・内容：職業レディネス・テスト（VRT テスト）の実施と結果分析、生徒へのフィードバックの方法

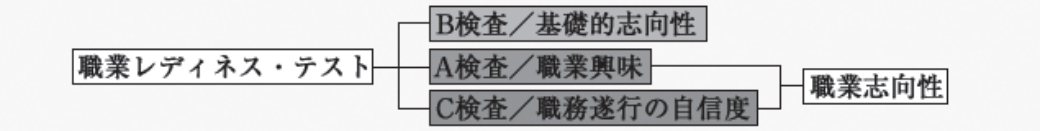
⑴　VRT テストの概要

・基礎的志向性（対情報、対人、対物）と職業志向性（6 つの職業領域に対する興味の程度と自信度）を測ることにより、生徒の職業に対する準備度（レディネス）を把握し、生徒が職業に対する自分のイメージをチェックしたり、進路選択への動機付けを促すことができる。
・興味と自信との関係、日常の興味・関心を客観的に図式化し、総合的に解釈することで、進路を探索する方向性をとらえることができる。
・回答者が自分のペースで実施する紙筆検査であり、若年者に対して、自己理解を深めさせ、職業選択に対する考え方を学習させる教材である。
・対象者は、中学生・高校生・専門学校生・短大生・大学生・職業訓練校生・職業相談機関等
・所要時間は、実施が 40 ～ 45分、採点も含めると 60分程度
（参考：雇用問題研究会「職業レディネス・テスト [第3版]」を基に作成）

⑵　テストの構成

・「職業興味」を測定する A 検査、「基礎的志向性」を測定する B 検査、「職務遂行の自信度」を測定する C 検査からなる。

【テストの構成】



（資料出所：雇用問題研究会「職業レディネス・テスト［第3版］」）

⑶ A 検査の測定内容

・A 検査は、職業・仕事の内容を記述した 54項目の質問からなり、各質問に対して、「やりたい」、「どちらともいえない」、「やりたくない」の 3段階で答える。生徒の興味が 6 つの職業領域において、どういった傾向を示しているかを測定する。

【職業領域の 6 領域とその内容】

職業領域名	内　　容
現実的職業領域 （Realistic：R 領域）	機械や物体を対象とする具体的で実際的な仕事や活動の領域
研究的職業領域 （Investigate：I 領域）	研究や調査のような研究的、探索的な仕事や活動の領域
芸術的職業領域 （Artistic：A 領域）	音楽、芸術、文学等を対象とするような仕事や活動の領域
社会的職業領域 （Social：S 領域）	人と接したり、人に奉仕したりする仕事や活動の領域
企業的職業領域 （Enterprising：E 領域）	企画・立案したり、組織の運営や経営等の仕事や活動の領域
慣習的職業領域 （Conventional：C 領域）	定まった方式や規則、習慣を重視したり、それに従って行うような仕事や活動の領域

（資料出所：雇用問題研究会「職業レディネス・テスト［第3版］」）

⑷ B 検査の測定内容

・日常の生活行動について記述した 64項目からなり、各質問に対して、「あてはまる」、「あてはまらない」で答える。生徒の基礎的志向性が職業への興味・関心の基礎となる、「対情報」、「対人」、「対物」の 3 つの志向性において、どういった傾向があるのかを測定する。

【基礎的志向性の３つの方向性とその内容】

方向性の名称	内　　容
対情報関係志向 （Data Orientation：D 志向）	各種の知識、情報、概念などを取り扱うことに対する志向性
対人関係志向 （People Orientation：P 志向）	人と直接かかわっていくような活動に対する志向性
対物関係志向 （Thing Orientation：T 志向）	機械や道具、装置など、いわゆる「モノ」を取り扱う活動に対する志向性

（資料出所：雇用問題研究会「職業レディネス・テスト［第3版］」）

⑸　C 検査の測定内容

・A 検査と同一の 54項目の質問で構成されており、各質問に対して、「自信がある」、「どちらともいえない」、「自信がない」の 3段階で答える。生徒の職務遂行の自信度を、A 検査と同じ 6 つの職業領域において、どういった傾向を示しているのかを測定する。

⑹　結果の解釈

①　得点の意味

・パーセンタイル順位：個人の尺度ごとの粗点が、基準集団の中で、どのあたりに位置づけられるかを明らかにすることによって、個人の特徴を表示しようとするもの。

・ある個人のパーセンタイル順位が 70 であることは、基準集団を構成している人の 70％は、その個人の得点より低い方に分布していることを示す（換算表は中学生・高校生別、男女別になっている）。

【パーセンタイル順位と一般的な解釈の目安】

パーセンタイル順位	一般的な解釈の目安
85 以上	興味、志向性、自信が強い
16～84	興味、志向性、自信がふつう
15 以下	興味、志向性、自信が弱い

（資料出所：労働政策研究・研修機構「職業レディネス・テスト［第3版］手引」2006年7月）

②　結果解釈の一般的な留意点

・得点は、測定上の誤差も考慮して、おおむね「強い」「普通」「弱い」の 3段階で解釈する。

・プロフィール全体の形状の特徴をみる。得点が高いことが望ましいわけではない。むしろ、プロフィールに山と谷がはっきりしていることがポイントである。山と谷がはっきりしていることは、興味や志向性が分化していることを意味しており、それだけ職業への準備性ができていると解釈される。

・検査の得点が全般的に低い場合、無理にパーセンタイル順位の高い領域をみつけて解釈をしない。むしろ、個々の質問項目に戻り、「やりたい」あるいは「どちらともいえない」という回答がみられた項目に着目したり、「やりたくない」という回答が多くなった理由を考えさせたりする。

・この検査の結果をストレートに適職や適性のある職業と結び付けて解釈しない。
・結果のフィードバックに際しては、受検者へきちんと情報提供し、受検者が納得できるような解釈と説明の提供を行う。
・結果の解釈を通して、職業情報の探索を促したり、進路選択への関心を高めるように援助をする。
・検査結果で選択すべき進路を決定するのではなく、個々の生徒が自分なりに結果について考え、選択の可能性を広げるようにする。
・適性検査の結果や進路希望調査等、他の資料と関連付けて結果を解釈する。この検査は職業興味の特徴を明らかにするが、生徒をよりよく理解するためには、本検査の結果に加えて、能力の側面や本人の希望等、様々な他の特徴についても総合して解釈すべきである。
・中学生、高校生は、心身ともに発達の途上にあり、職業興味は変化することを念頭に置いて解釈し、指導する。検査の結果は、実施した時点での興味を切り取って示した結果に過ぎない。特に、中学生、高校生は心身ともに大きく変化する時期であり、経験や成長に伴って興味も変化するであろうことを前提として解釈すべきである。

（参考：労働政策研究・研修機構「職業レディネス・テスト [第3版] 手引」2006年7月を基に作成）

③　VRT テストを活用したキャリア教育の実践

・結果の解釈を通して、職業について調べることや職業情報の探索を促したり、進路選択への関心を高めるように援助をする。
・テスト結果から選択すべき進路を決定するのではなく、個々の生徒が自分なりに結果について考え、選択の可能性を広げるように指導する。
・適性検査の結果や進路希望調査等、他の資料と関連付けて結果を解釈する。このテストは職業興味の特徴を明らかにするが、生徒をよりよく理解するためには、テストの結果に加えて、能力の側面や本人の希望等、様々な他の特徴についても総合的に勘案して解釈することが求められる。

（参考：労働政策研究・研修機構「職業レディネス・テスト [第3版] 手引」2006年7月を基に作成）

Part2

高等学校の部

第4章

キャリア教育授業の実践

1　キャリア教育授業の趣旨、目的及び実践

⑴　授業の趣旨

・高等学校等のキャリア教育の主要な担い手である教員が、雇用・労働に関する知見や自己理解・職業理解等のキャリア・コンサルティングの技能を活用したキャリア教育の授業を実践することで、キャリア・コンサルティングやキャリア教育に対する理解を深める。

・高校生に対するキャリア教育において、キャリア・コンサルタントが有する自己理解、仕事理解等に係る知識を生かしたキャリア教育の授業を実践する方法を身に付けることで、キャリア教育を実践している教員を支援するとともに、高等学校等におけるキャリア・コンサルタントの活用促進を図る。

⑵　授業の目的

・高校生が進路先で遭遇することが予想される事象について対処する方法について考えることで、将来の生活（大学・短大・専門学校等での学生生活や就職した後での職業生活）に適応することができるよう、自己理解・自己管理能力、課題対応力及びキャリア・プランニング力を養成する。

・グループワークを通じて、メンバー相互の話合い等を実施し、メンバー同士のコミュニケーション能力、メンバーが役割を分担した上で相互に協力・協働して課題に取り組む姿勢、人の話を聴く力と自分の意見を述べる力、自分の意見を主張する力と他人の意見を受け入れる力、決められた時間内に課題を解決して答えを出す力等、人間関係形成・社会形成能力を養成する。

⑶　授業の実践

・キャリア教育は、特にホームルーム活動（いわゆるロングホームルーム活動）や総合的な学習の時間を中心になされることが多い。

・キャリア教育の内容に含まれる雇用・労働・職業に関する分野などは、公民：現代社会や政治経済、産業社会と人間の内容に関係するところも多い。

2　高等学校の学習指導要領とその解説

・教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項：キャリア教育を推進するために、地域や産業界等との連携を図り、産業現場等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得るよう配慮するものとする

（出典：文部科学省「高等学校学習指導要領解説総則編」2009年7月）

⑴「公民：現代社会」の目標と内容（抜粋）

①　目標

・人間の尊重と科学的な探求の精神に基づいて、広い視野に立って、現代の社会と人間について理解を深めさせ、現代社会の基本的な問題について、主体的に考察し、公正に判断するとともに、自ら人間としての在り方生き方について考察する力の基礎を養い、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。

②　内容

ⅰ 青年期と自己の形成：生涯における青年期の意義を理解させ、自己実現と職業生活、社会参加、伝統や文化に触れながら自己形成の課題を考察させ、現代社会における青年の生き方について自覚を深めさせる。

・ここでは、現代社会に生きる青年として、青年期の意義を理解させるとともに、自己の内面形成と社会とのかかわりに着目しながら自己形成の課題を考察させ、青年としていかに生きるかを考察することの大切さについて自覚させることを主なねらいとしている。
・指導に当たっては、自己と社会とはどのようなかかわりをもっているのか、青年としてどのように生きるのかについて考察させるとともに、多くの可能性の中から自らの生き方を模索しつつ自己形成の課題を明らかにしていこうとする態度や、主体的に社会の形成に参画しその発展に寄与する態度を養うよう配慮することが大切である。
・「生涯における青年期の意義を理解させ」については、青年期は自己を確立する基礎を培う重要な時期であり、親などからの依存を脱却し、自らの生き方を多くの可能性の中から選択しつつ社会とかかわり合う中で自己を形成し、心理的、社会的な自立を遂げていく重要な時期であることを理解させる。また、青年期は自己の内面と現実社会との葛藤の中から、アイデンティティを確立する時期であることを理解させるとともに、よりよく生きることを追求することの大切さを自覚させる。

・「自己実現と職業生活」については、現代社会の特質や社会生活の変化とのかかわりの中で職業生活をとらえさせ、望ましい勤労観・職業観や勤労を尊ぶ精神を身に付けさせるとともに、自己の個性を発揮しながら新たなものを創造しようとする精神を大切にし、自己の幸福の実現と将来の職業生活や人生の充実について触れながら考察することが大切である。
・「社会参加」については、自己とのかかわりに着目させながら、自己形成にとって社会とのかかわりが重要であること、社会参加することによって、社会の維持・発展に貢献するばかりでなく、自己実現を可能にすることができることを理解させ、どのように社会的役割を担っていくのかについて考察させる。
・「自己形成の課題を考察させ」については、人間は社会的存在であり他者とのつながりや社会とのかかわりなしでは生きていけないことや、他者と共に生きるには自己の幸福の追求と自己を取り巻く社会との調和が大切であることに気付かせ、責任ある個人として社会に積極的に参加していくことが求められていることなどについて理解させた上で、自らの人生や進路選択などを視野に入れながら、自己形成にかかわる自らの課題を考察させる。
・「現代社会における青年の生き方について自覚を深めさせる」については、自己に対する理解を深めさせるとともに、現代社会に生きる青年として、より良く生きることの大切さを自覚させる。例えば、青年としての自己の目的を実現しようとする行動と社会の利益が対立した場合を課題として取り上げ考察させ、自覚を深めさせることが考えられる。

ⅱ 現代の経済社会と経済活動の在り方：現代の経済社会の変容などに触れながら、雇用、労働問題、社会保障について理解を深めさせるとともに、個人や企業の経済活動における役割と責任について考察させる。

・「雇用、労働問題」については、近年の雇用や労働問題の動向を、経済社会の変化や国民

の勤労権の確保の観点から理解を深めさせる。その際、終身雇用制や年功序列制などの制度の変化、非正規社員の増加、中高年雇用や外国人労働者にかかわる問題、労働保護立法の動向、労働組合の役割、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）などと関連させながら、雇用の在り方や労働問題について国民福祉の向上の観点から考えさせることが大切である。

・「社会保障」については、疾病や出産、障害、加齢など様々な原因により発生する経済的な不安を取り除くなどして生活の安定を図り、人間として生活が保障される社会保障制度の意義や役割を理解させるとともに、現状と課題などを、医療、介護、年金などの保険制度においてみられる諸課題を通して理解させる。またその際、少子高齢化の進行や、財政との関連、保険料の負担などとの関係について考察させる。
・「個人や企業の経済活動における役割と責任について考察させる」については、個人や企業が社会を構成する一員として、経済活動において役割を担い、また法的責任のみならず社会的責任を担っていることを考察させることが大切である。

（参考：「高等学校学習指導要領」2009年3月及び「高等学校学習指導要領解説 [公民編]」2009年12月を基に作成）

(2) 「公民：政治・経済」の目標と内容（抜粋）

① 目標

・広い視野に立って，民主主義の本質に関する理解を深めさせ，現代における政治，経済，国際関係などについて客観的に理解させるとともに，それらに関する諸課題について主体的に考察させ，公正な判断力を養い，良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。

② 内容

・現代日本の政治や経済の諸課題：少子高齢社会と社会保障、地域社会の変貌と住民生活、雇用と労働を巡る問題、産業構造の変化と中小企業、農業と食糧問題などについて、政治と経済とを関連させて探求させる。
・「雇用と労働を巡る問題」については、少子高齢化や産業構造の変化、規制緩和の進展などにより就業構造が多様化し労働市場が大きく変化していることなどを、日本の労使関係の特色、勤労の権利と義務、労働基本権の保障、労働条件の改善、労働組合の役割などに触れながら理解させる。

・このような理解の上に立って、日本の労働市場の特徴とされてきた終身雇用制や年功序列型賃金体系、労使協調などにより雇用の安定を確保するという考え方と、規制緩和による就業形態の多様化、成果主義に基づく賃金体系、労使の新しい関係などにより労働力を効率的に活用するという考え方とを対照させ、雇用の安定化と労働条件の改善という視点や仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の視点などから、今後の日本の雇用・労働政策の在り方について探求させる。
・例えば、派遣労働者やパートタイマーなど非正規労働者、女性や若年者、高齢者、障害者等の雇用・労働問題、失業問題、外国人労働者問題など具体的な事例を取り上げて探求させることが考えられる。また、諸外国における労働条件や労使関係、労働組合の現状、外国人労働者の流入などについて調べさせ、日本の今後の雇用と労働の在り方について探求させるこ

などが考えられる。

（参考：「高等学校学習指導要領」2009年3月及び「高等学校学習指導要領解説 [公民編]」2009年12月を基に作成）

(3)「産業社会と人間」のねらいと指導事項

① 科目のねらいなど

・総合学科における「産業社会と人間」は、人間としての生き方の探求、特に自己の生き方の探求を通して、職業を選択し、決定する場合に必要な能力と態度を養うとともに、将来の職業生活を営む上で必要な態度やコミュニケーション能力を培うことや現実の産業社会やその中での自己の在り方生き方について認識させ、豊かな社会を築くために積極的に寄与する意欲や態度を育成することをねらいとしている。

・各学校において「産業社会と人間」を設ける場合、目標の設定に当たっては、産業社会における自己の生き方について考えさせ、社会に積極的に寄与し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を養う観点に留意する必要がある。また、生徒が自己の進路に応じ主体的に各教科・科目の選択ができるように、就業体験や見学等の体験的な学習、調査・研究や発表・討論などの生徒の主体的な活動を重視した学習方法を積極的に取り入れるよう配慮する。

② 指導事項

・職業と生活：各種企業や施設等の見学及び就業体験やボランティア活動、卒業生や職業人等との対話、発表や討論等を通して、職業の種類や特徴、職業生活などについて理解するとともに、勤労の意義について考察し、職業人として必要とされる能力・態度、望ましい勤労観・職業観を養うための学習を行うこと。

・我が国の産業と社会の変化：先端的な工場や情報関連企業等の見学、技術者や海外勤務者等の講話、調査研究や発表・討論等を通して、我が国の科学技術の発達や産業・経済の発展・変化について理解し、それがもたらした情報化、国際化等の社会の変化、人々の暮らしへの影響について考察するための学習を行うこと。

・進路と自己実現：発表・討論、自己の学習計画の立案等を通して、自己の能力・適性、興味・関心等と各種職業に求められる資質・能力を踏まえ、自己の将来の生き方や進路について考察すること。

（参考：「高等学校学習指導要領」2009年3月及び「高等学校学習指導要領解説 [総則編]」2009年7月を基に作成）

(4)「総合的な学習の時間」の目標と内容

① 目標

・横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする。

② 総合的な学習の時間の内容の取扱い

・問題の解決や探求活動の過程においては、他者と協同して問題を解決すようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること。

・自然体験や就業体験活動、ボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験・実習、調査・研究、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること。
・体験活動については、総合的な学習の時間の目標並びに各学校において定める目標及び内容を踏まえ、問題の解決や探究活動の過程に適切に位置付けること。
・グループ学習や個人研究などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制について工夫を行うこと。
・各種団体との連携、地域の教材や学修環境の積極的な活用などの工夫を行うこと。

（参考：文部科学省「高等学校学習指導要領」2009年3月及び「高等学校学習指導要領解説 [総合的な学習の時間編]」2009年7月を基に作成）

3　授業の内容

生徒が進路先の生活に適用するよう準備するためのワーク

「ディスクジョッキー・進路先で困っているの」

（進路先への適応）

学習のねらい	・進路先で遭遇すると予想される事例を挙げ、対処する方法について考えることで、進路先の生活（大学等での学生生活・企業等での職業生活）に適応できるように準備する。 ・ラジオの番組に視聴者からの相談の葉書が届いたと仮定し、学習者がラジオのDJ（パーソナリティ）になり、視聴者の悩みに対して適切なアドバイスをしていく形を取りながら、集団生活としての進路学修を位置付け、グループの中で積極的に発言し、真剣に聴く態度を養成する。
実施学年	2年生・3年生
事前指導準備	・事例カードを、厚紙などにグループの数だけ印刷する。 ・リハーサルメモ、DJ診断表、振り返りシートを人数分用意する。 ・事例カードを切り取るはさみを用意する。 ・ワークの手順書を配付し、学習の要点や展開を説明する際に活用する。 ・当日までに事例カードを配付し（当日の朝のショートホームルームの時間などを活用する） ・カードを切り離しておくとともに、白紙カードを各自に同数配付し、各自のオリジナルな相談内容を記入させる（それができない場合には、オリジナルを作成しないで、既存のカードだけで実施する）。 ・事例カード（と各自が相談内容を記入したカード）を混ぜ合わせて、トランプの要領できってから、グループメンバーに分配する。 ・各グループメンバーは、配布されたカードを読み上げ、他のメンバーとともに、質問に対する回答を考えて、用紙（リハーサルメモ）に記入していく。

◆授業の展開

時間	活動の内容	留意点
開始 ５分	・指導者による、学習の狙いの説明。 ・決められたグループに分かれて着席する。 ・事前に配布された相談葉書（事例カード等）、リハーサルメモを用意する。 ・ゲームの手順を説明する。	・カードや用紙の忘れ物対策等を講じておく ・ワークの手順書（ワーク実施のルールを説明したもの）を見せ、それを読みながら、ワークの手順を説明する。 ・１グループは、4名ないし６名程度。
活動 の 展開 30分	・質問に対する回答を記入する用紙を各自に配布する。 ・ジャンケンで順番を決める。 ・ワークのルールを説明する。 ・ワークを開始する。ワーク中、最初の人がＤＪとなり、事例カードを読み上げ、それに対する回答を全員で考える（2 分間）。回答案を順番に読み上げた後、全員で意見を出し合い、グループとしての回答をまとめる（5 分間）。 ・グループメンバー全員が DJ を経験し、全員が終了したところで、ワークを終了する。	・ワークの手順書を活用する。 ・他人の回答を中傷したり、不快にさせるような発言がなされないように注意を促す。 ・決められた時間内に、グループとしての意見をまとめるように、進行管理する。
まとめ 15分	・各グループから、質問の事例とそれに対するグループとしての答えの内容、どのような理由でその回答ができたかの説明、グループの意見をまとめるときに工夫したこと等を発表してもらう。 ・各グループの発表で同じ事例がある場合には、内容を比較して、それぞれの回答で優れた点などをシェアする。 ・ワーク参加メンバーは、どのグループ（放送局）のどの回答がベスト１であるか、その理由は何かを発表する。 ・指導者が、このワークのまとめを行う。 ・振り返りシートを配付して、次回までの宿題とする。	・発表時間は、グループの数により調整し、すべてのグループに発表させ、講評を行う ・振り返りシートは、時間の関係で宿題とするが、必ず指導者に提出させ、事後の定着を確認する。

◆事後の指導・活動

・自分の進路を考えた場合、進路先でどのような課題に遭遇するか予想をたてることができたか。また、自分が予想したような課題に対処するには、高校在学時にどのような対策を講じておけば良いのか、自分の考えをまとめてみる。

・作文や面談を通じて、確認する。

（参考：東京都高等学校進路指導研究協議会進路学習部会（笹のぶえ先生ご担当）『ディスクジョッキー・進路先で困っているの』平成９年度研究大会発表資料を基に事務局が編集）

【配布する資料等】

・DJ リハーサルメモ（質問に対する回答を記入する用紙）

・各メンバーが回答を記入する用紙：グループメンバー数の２乗（４人のメンバー数であれば、16枚）

・グループとしての回答を記入する用紙：グループメンバー数と同じ

・事例カード（10 ～ 20項目程度）

・大学での勉強（授業・ゼミ・資格）

・大学での生活（日常生活・アルバイト・サークル）

・友人関係・異性との付き合い

・仕事のこと（やりがい、成長、能力、失敗）

・待遇（給与、残業、労働時間、通勤時間）

・職場での人間関係（上司、先輩、同僚、後輩）

・振り返りシート

【準備する資料等】

・講師用手引き

・メンバーに配布するワークの手順書

・メンバーが記入する質問用紙

・はさみ（事例カードを切る必要がある場合）

Part2

高等学校の部

第5章

キャリア教育の提案と実践
（アクティブ・ラーニングの提案と実践）

授業の開発と教材の作成（キャリア・コンサルタントの専門性を活かしたキャリア・コンサルティングの実施）

【企画するテーマの例】

ＶＲＴテストの結果を活用し、生徒のキャリア形成を支援するために、生徒との個別のキャリア・コンサルティング（結果のフィードバック）を行う

高等学校におけるキャリア・コンサルタントとして

高校におけるキャリア形成支援の経験は、「自分らしく生きるとは～、働くとは～、事務の仕事とは～」などの様々なテーマをグループワーク形式で考える「出前授業」から始まりました。授業では、その日初めて会う生徒の気持ちを受け止めながら、授業の目的をしっかり伝え、授業に巻き込んでいく工夫が必要でした。その後、生徒や保護者との個別面談、キャリアセンター設立に向けた支援と活動は広がっていきました。

私が接した生徒は、自分の可能性に夢を膨らませている一方で、大人への信頼感と自己肯定感の低い生徒が少なくありませんでした。そうした生徒がキャリア・コンサルタントである私に求めているのは、親や教師とは異なる立場で自分を一人の人間として対等に扱ってくれる「第3の大人」という立ち位置、換言すれば友達や先輩では不十分な専門知識を教えてくれたり、悩みを共に考えてくれる「専門家」という役割でした。

他方、学校から求められていたのは、生徒が希望する進路の実現に向けたモチベーション高揚のためのキャリア・コンサルテーション全般、クラス担任との連携、外部専門家人材として、外部資源とのネットワーク構築、などです。

生徒と学校双方のニーズを合せて考えると、高校のキャリア・コンサルタントに期待されているのは、「進路コーディネーター」としての機能と役割です。そうした機能と役割を果たすためには、廊下でのちょっとした会話の中からでも課題を把握する力、本音ベースの問題を受け止め解決に向け一緒に考えていく姿勢、周りにいる専門家たちの支援を得るためのネットワーク構築などが必要です。

最近特に意識しているのは、地域にある様々な支援機関との密接な連携による重畳的な支援を行うことです。発達過程での問題や親の困難を引き継ぐ等、様々な課題を抱える生徒に対し、専門機関や専門家と連携・協働することで、キャリア・コンサルタントとして、必要とされる時期に、必要とされる価値を提供できるよう、さらなる研鑽を重ねたいと思います。

2級キャリア・コンサルタント　木村　美和子